
BOTTLE VIKINGS !

鈴木成明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BOTTLE VIKINGS!

【Nコード】

N9428A

【作者名】

鈴木成明

【あらすじ】

ド辺境星域のド田舎惑星の生物館で働くミロは、暢気で気さくでお人好しな宇宙生物学者だが、実はあらゆる生命体の感情を感知する能力を持つアテン人だった。そんなミロは、なんだかよくわからない内に「タレス」という物質創造能力を授かり、仕事中に偶然出逢った二人の美少女、銀河最強のガーディアンを持つ銀河財閥の令嬢リンダと、がさつで超風呂嫌いの女海賊カレンと共に、「瓶の海賊」として全銀河指名手配されてしまう……。まあ、ぶっちゃけドタバタスペオペで、簡単に言うと主人公のミロが元気な女の子に振

り回されるお話です。

ACT. 1 遺跡

「……ザケンナ馬鹿野郎っ!!」

ハスキーでヒステリックな絶叫が、廃虚にこだました。声の主は、たった今古代遺跡の地下から持ち出した大きな壺を渾身の力で叩き割り、壺の欠片が粉々になるまで踏みつぶし、その破片を蹴り飛ばして毒づいた。

「あークソっ! 一期の壺なんかありやしねえっ! またあのクソじじいに騙されたってわけかよっ!」

一頻り罵って少し気が済んだのか、彼女は……そう、彼女は歴とした女性であり、しかも非常に均整の取れた肉体の持ち主であり、長い睫毛に大きな釣り目の妖艶な美人だった。彼女はパイナップルを二つ頭に付けたような、自慢の七色の髪をブルブル振って砂埃をふるい落とし、毛先をバサバサと手で払った。そして腰のポシェットから小さなブラシを取り出し、両腕の和毛を軽くブラッシングしてからブラシをポシェットに戻して、突然音もなく滑るように走り出した。

彼女はそのまま自分の小型宇宙艇に飛び乗り、一気に上空二〇〇メートルまで浮上し、そこで一旦停まって長い足と手を組みながら、さてこれからどうしたものかと思案した。しかし、ふと目に入った眼下の都市をまじまじと見つめ、その都市のデータをスクリーンに出した。

(……へえ、こんなクソ田舎に博物館あんのか……よしっ!)

何やらよい事でも思いついたのか、彼女は鼻歌混じりに座標をセツトした。行き先はこの星で最も繁栄している中枢都市の一つ、八〇八タウンだった。

閉館時間を二時間過ぎて、ようやく今日の仕事も終わりがけた時

だった。少年のような童顔で青い髪の青年が席を立つと同時に、小太りで短身の男が青年に声を掛けた。

「あー……ミロ君。……あのさ、スコープの調子が悪くてさ……」

「……予備のスコープもですか？」

「あー、いや、ほら……あれも調子悪いから、使う気しなくて……悪いけどシエルター手伝ってくんないか？」

男が話し掛けて来た時点で男の思惑に気付いていたミロは、苦笑混じりに答えた。

「……ええ、いいですよ」

遺跡を活用して建てられた「八〇八タウン銀河稀少生物館」には、第六銀河系内で発見された約二千種類の比較的安全な稀少生命体が保管されていたが、中には光を当てると空間を歪め始める生命体があり、そのような生命体のために「シエルター」という地下施設があり、その男は今日はシエルターの清掃当番だった。

「……いや悪いな、ホント」

「いえいえ」

清掃とはいえ、塵や埃を除去して生命体の記録を付けるだけだが、真つ暗闇の中で得体の知れないものと対峙するのは不気味な作業であり、かと言って全部ミロに押しつけるわけにもいかず、男はこうして時折ミロに作業を手伝わせていた。しかし、本来清掃は去年まで業者に依頼していたので、職員が清掃を始めたのは最近のことであり、それもこれも全ては生物館の資金不足が原因だと思っていたミロは、特に文句もなく作業を手伝っていた。

そんな清掃も終わる頃、ふと男はミロに尋ねた。

「なあ……ホントにお前さん、見えてんのかい？」

男はスコープ無しで作業するミロを幾度か見ていたが、この時は何故か急に不思議に思えて、あらためて尋ねてしまった。ミロは一瞬きよんとしてから、にこやかに答えた。

「……ええ、見えますよ、見えるっていうか、物がどこにあるか分かるくらいですけど」

「ふーん、便利な目だなあ、お前さんの星の連中はみんな……」と言いつけた時、地鳴りのような唸りが響き、男はぶるっと身を震わせた。

「……まったく、あのドラゴってヤツあ、なんでここにいるんだ？……あんな物騒なもんは、早く殺すか他所にやっちまえばいいのに……」

このシェルターは地下二〇階まであり、その内の地下五階まで一般公開していたが、その唸りはミロ達がいる地下十五階の下から響いていた。男は自分の怯えを払拭するために話題を変えた。

「そ、そういやあ二〇だか三〇だか、あっちのインテリ星系の試験受かったって聞いたけど、ホントかい？」

ミロは苦笑しながら答えた。

「……第二三星系の星間生態系調査隊の入隊試験です」

「そうそう！学者さんってさ、あっちに行きや給料いいんだろう？なんで行かねえのさ？」

ミロはまたにこやかに答えた。

「フフ……遠いんですよ、果てしなく！二〇回ホールを使っても、着くまで基点時間で三年以上掛かるんですよ」

「三年！？……はあー！しかも、じゃあなんでそんな試験受けたんだ？」

それは男の純粋な疑問であり、ミロも気兼ねなく答えた。

「なんとなくですよ！試験はホールネットで受けられるし、それに受験料が安かったから」

「はあ……三年はつれえよなあ……お前さんたちやあ寿命もあれだしなあ……」

その言葉が本心かどうかはさて置き、ミロは自分に言い聞かせるつもりで答えた。

「まあ、それだけじゃないんですけど、とにかく遠いんで、ホントにただ……気分転換に受けてみただけなんですよ」

「まあなんつーかアレだ……急にいなくなったら困るわ。当分いて

くれよな！ハハハ！」

それは自分本位な要求だが、丁度作業も終わったところなので、ミロはこの取り留めもない会話を終わらせようと思った。

「……後は俺が片付けますから、もう上がってください」

「おお、そうかい？ありがとな！」と礼を言うなり、男は逃げるように部屋を出て行った。

「……」

実のところ、道具を片付けながらミロは少し驚いていた。それは試験のことは誰にも話していなかったからだ、少し考えて、それがわかってあまり意味がないことに気付いて考えるのを止めた。そしてミロは耳をすまし、完全に誰の気配もないことを確かめた上で囁いた。

「行ったよ……もう大丈夫」

「……」

返事がないので、ミロは普通の声で続けた。

「大丈夫だって……ドラゴは眠ってるよ」

しかしその時また地鳴りが響き、ミロは頭を掻きながら「ごめん、起きてた。……今なだめてくるから待って！すぐ戻ってくるから！」と言って急いで階段を降りて、最下層である地下二〇階に入った。

遺跡に殆ど手を加えていないその部屋はドーム状であり、中型宇宙船がすっぽり入る程の広さだった。部屋の中央の床には、大人の頭ほどの青白く光る球体が底にめり込んでいて、その部屋の光源はその球体が発する光だけだった。ミロがその部屋へ着いても微かな地鳴りが続いていたが、その球体にミロが歩み寄るにつれ、地鳴りは収まり、代わりにキュウキュウという可愛らしい小動物の鳴き声がミロの耳に入った。

ミロはしゃがみながら微笑み、球体をのぞき込んで話しかけた。

「……こんばんはドラゴ。君はそんなにあの人が嫌い？フッフ」

「キュー、キューウ」

それは全長一〇センチにも満たない、かつて基点星系にいた「トカゲ」という爬虫類に良く似た生命体だった。ミロは一度天井を見上げてから、ドラーゴと呼ばれる第三星域最強の古代生物に向かって、ばつが悪そうに語りかけた。

「……ごめん！……今日は何も持ってきていないんだ」

ミロは両腕を軽く開いて、何も持っていないというゼスチャーをしてみせが、ドラーゴは「グェ…」と不満そうな声を上げて、ぷいとそっぽを向いた。

ミロは苦笑混じりに首を振り、胸ポケットを手で押さえながら言った。

「これは……あげられないんだ。……コピーなら明日持って来れるけど……」

ドラーゴはミロの顔をじっと見つめてから、「グイー…」という寝る前にする鳴き声をあげて、胎児のように身体を丸めながら横になった。ミロは目を細めながら、優しく呟いた。

「……お休み……フフ……ここに悪魔がいるって言う人いるけど、その格好見ても、まだみんな悪魔だなんて言うかな？」

ミロはそつと立ち上がり、男といった部屋へ戻った。そしてドラーゴと会う前に話し掛けていたものへ再び声を掛けた。

「……ただいま」

それは一言では名状しがたいものだった。強いて言うならばバケツに張った水を完全に氷る前にひっくり返して取り出したような形とでも表現するしかない、直径三〇センチ、厚さ五センチ程の気泡混じりの透明な円筒だが、固体ではなく、触れると水のように美しい波紋が現れ、時にはキーンという音を出す、この星に人が移住した時に発見された遺跡の一部だった。

ミロがシェルターに戻った頃には、既にその生命体はゆらゆらと小さな光る波を立てていた。ミロはその波の美しさに見とれながら、微笑んで言った。

「……安心して、ドラーゴは眠ったよ。フフ……お前はホントに……」

…綺麗だね」

ミロはドラゴに語りかけた時と変わらぬ口調で優しく続けた。

「……お前もドラゴも、ホントに不思議な生き物だよ……特に
お前は……怒らないで欲しいけど、正直ヘンな生命体だ……調べ
てもただの水だしね……」

ミロの言葉に合わせて波紋が広がり、それはまるでミロに答えて
いるようにしか見えなかった。しかし、不意にそれは形を変え始め、
見る間に人の形に変貌した。

「……どうしたの？……あ」と苦笑して、ミロはポケットから一
枚の写真を取り出した。それは彼と同じ青い髪を風になびかせて微
笑む、一人の可愛らしい少女の写真だった。

「……」

写真の少女と水がつくり出したフィギュアを見比べ、ミロは目を
閉じ、心の耳をすませた。

【……サミ……シイ？……ウレ……シク……ナイ？】

途切れ途切れの言葉が、言葉と言うよりも想いが、ミロの胸に伝
わってきた。ミロはくすりと笑い、はにかみながら答えた。

「……うん、ちょっと寂しいかな？でも……それよりも嬉しい」
声に出す必要は無く、ただ思うだけでいいのだが、ミロはいつも
声に出して答えた。それはそうする方が、ミロにとって自然に思え
たからだった。

「……ありがとう、この子さ……エルっていう幼なじみでさ、負け
ず嫌いなくせにちょっと引っ込み思案で……ヘンな奴でさ……」

【……エル……ア……イ……タイ？】

「……」

ミロは微笑んだが、その間には答えず別なことを考えていた。こ
こへ来てから基点暦で五年が経ち、つい最近この生命体に意思疎通
能力があることを発見したが、ミロはまだ誰にも話していなかった。
それは話せるほどデータが取れていないからだが、もう一つ、ミロ
はドラゴとこの生命体との間に何か大きな関係があるのではない

かと考えていた。もつとも、それを証明するためには単なる凶暴な高エネルギー古代生物と思われるドラゴが、実はミロの写真を見たがるような知的生命体であることをも証明しなければならなかった。

(……ま、いっか……)

しかし、もしそれを証明した場合、誰かが必ずドラゴのエネルギーを利用しようとするだろうことは目に見えているので、ミロはそれ以上考えるのを止めて、フィギュア……優しい遺跡の生命体の方へ意識を戻した。ミロはフィギュアに向かって少しはにかんで答えた。

「……約束したんだ……いつか必ず迎えに行くって。……待ってるとは思えないけどね」

ミロの故郷はこの星からそれほど離れてはいないが、近いとも言いたい難しい微妙な距離にあり、それでも急げば半年ほどで帰ることはできた。しかし五年も帰らないでいる一番の理由は、故郷を出る間際にエルと大喧嘩をしてしまったからだ。ミロの約束はその喧嘩の前にした約束であり、約束と喧嘩は関係ないのでいつでも帰ってよかった。しかし、そう思いつつも五年が過ぎてしまったことに、ミロが微かな焦りを感じていたのは確かだった。

【ア……エル】

「……フフ……ありがとう」

複雑なミロの心をその生命体が本当に聞き取ったかは疑問だが、彼は一応礼を述べた。

「……うん、まあ……俺は信じている。それでいいよ……」と言うなり、ミロはガクリと膝をつき、顎からしたたり落ちる汗を袖で拭い、呼吸を整えてから言った。

「……そろそろ……帰るね。また今度……三日くらいしたら、また来るよ」

そしてミロが二三度瞬きをした後には、その生命体は元の姿に戻っていた。ミロが生物館を出た頃にはすっかり暗くなっていて、メ

インストリートの人通りもまばらになっていた。ミロは疲れを明日に残さぬよう、とにかく寝る事だけを考えながら住まいへと向かった。

同じ頃八〇八タウンの郊外で、あらん限りの罵詈雑言を絶叫しながら、故障して墜落した自分の宇宙艇を蹴り続ける者がいた。

「ガーッッッ！！、こんクソ○▲◆×○□×ッッ！！」

しかしここは砂漠であり、このまま蹴り続けていれば命の保証はないので、彼女は船に見切りをつけて徒歩でタウンへ向かうことにした。そして杖をつき、時には転びながら、暗闇の中をたった一人でとぼとぼ歩き続ける内に、また怒りが込み上げてきた。

「…………クソじじい…………今度会ったら●●して×××して、あーもうっ、そんなんじやダメだっ！せめて▲△○してから●●して、そんでもって蹴り三発ぶっこんであのムカツク髭髯ってやるっ！」

そしてこんなことを二三度繰り返している内に、彼女はタウンの外壁にたどり着いた。

つづく

ACT. 2 女海賊カレン

「だーかーらあ……違ーっつってんだろっ！！」

ハスキーな恫喝が八〇八タウン十八番街警察署にこだました。どうにか砂漠を抜けた彼女は、タウンに入ったところで力尽き、高いびきで寝ているところを巡回中のパトロールロボットに保護されてしまった。そして彼女は不信人物として取り調べを受けているわけだが……頬に掛かった彼女の唾を手の甲で拭いっつ、長い足をゆっくり組み替えながら、下着が見えるほどのミニスカートを履いた、基点年齢で二〇代後半の女性は深い溜息を洩らしながら思った。

（……なんで私がこんな小娘相手しなくちゃ……まあ面白いからいいんだけどさ……っていうか、なんで誰もいないの？……どーせみんなサボってんだろーけど……）

八〇八タウンには空港を基点として放射状に三〇程の自治区があり、各区に二〜三〇の街があって、その中でも十八番街は特に治安のよい小さな街だった。それ故人間が常駐している警察署は一カ所しかなく、いつもパトロールロボットが何となく巡回パトロールをしているだけという、実にのどかな街だった。

その十八番街警察署長である女性は、丁度その時署に誰もいなかったがために署長自ら取り調べをしていたわけだが、パトロボが連れてきた小娘が久しぶりにあー言えばこー言うタイプの面白い娘だったので、退屈凌ぎにからかっていた。

「……まあまあ！粋がりたい気持ちって誰にでもあるわよね！それってわかる！すごいわかる！……私も昔さ……お婆ちゃんの年金盗んでよく遊んでたし……だからさっさと住所と年齢、電話番号と職業を教えてちょうだい。ね？……ゲノムデータは守ってあげるから！」

彼女は一度身を引き、眉を顰めながらまじまじと署長を見つめた。しかし負けてなるものかと声を張った。

「……てめえと一緒にすんじゃねえっ！つーか……だからこんなクソ田舎星に住んでねえし、元々海賊に住所なんかねえし！……さっきからご当人だって言ってるんだろっ」

署長は腕を組み、満足そうに頷きながら優しく言った。

「うん、うん！……貴女だけじゃないのよ？最近多いの。俺は宇宙海賊キャプテン・ロックだーとか、私はスペースバイキング・キヤッサリーンズとか……貴女の言うことが、全部嘘だって言ってるじゃないんだけど、でも貴女が一匹狼・女海賊カレンだなんて信じろって言われても、そーゆー免許証があるわけじゃないでしょ？」

彼女は目を見開き、牙を剥きだし、頬を真っ赤に染めながら猛然と言い放った。

「だからその一匹狼っての止めれっっ！ダセえしムカツクしっ！アタイは犬っころじゃねえっ！虎だっつってんだろっ！！」

しかし、署長はにっこり微笑んで答えた。

「うん！いいから、住所言いなさいって！ね？何番街なの？ハーレムでも恥ずかしがらなくていいの！私だって昔ハーレムの近くに住んでたんだから！」

(……ダメだこりゃ)

実のところ、手足を電磁錠で縛られてはいるが、彼女の力ならいつでもこの警察署から逃れることはできた。それでもそうしなかったのは、この「一匹狼」という言葉を訂正させたかったからに他ならなかったが、しかし、それももう限界を超えた。

(こーゆー、人の話なんも聞かねえ女にや、結局なに言ってもダメだ。そうと決まりや……)

これ以上留まる理由はないと結論付けるや否や、彼女は電磁錠をいとも簡単に引きちぎり、にっこりと微笑んで言った。

「一匹狼でもなんでも好きなように呼んでくれ。飯は美味かった、ありがとよ。じゃあな」

そして唾然としている署長を後目に、署を出ようとした時だった。『先輩っ！じゃなくて署長！彼女本物です！パーフェクトクローン

の可能性もあるけど、ゲノムデータ合致しました！ド本人で、本部から殺傷許可もできましたあーっ！」

甲高い無線の音が終わると同時に、署長は腰の銃を握っていた。しかし、既に目の前にいるはずの彼女の姿は忽然と消えていた。

（くっ！でっかい魚だったのにっ！！）と思いながら、署長はマイクのスイッチを緊急モードに切り換えて叫んだ。

「緊急警備っっ！五番から二五番街を完全封鎖！パトロボに任せないで各ブロックの責任者が自分で当たれっ！十八番街パトロール中の全署員に告ぐっ！」「女海賊カレン」が現在十八番街を逃走中だっ！殺傷許可が出ているが見つけ次第捕縛しろっ！以上っ！！」

途端に十八番街のそこかしこでサイレンが鳴り響いた。

「いいこと？……折角お忍びでこんな辺境の星にやってきましたのに、あなた達がいたら、バレちゃうでしょう？」

少女はおそらく隠れているつもりだろうが、その美しいブロンドお下げの輝き是否応なしに人目をひいていた。基点年齢で十二〜三歳ほどの少女は人さし指を立てながら、幼い子に言い聞かせるように言った。

「こういう公共の建物の中にいる人達はね、SPと同じなの。だからあなた達がここに隠れてさえいれば、ワタクシはこの博物館で、一人でゆったりといろんなものを見て回れるの。……わかって？」

彼女が話し掛けていたのは、浮遊する金属製の二つの球体だった。大きさは直径三〇センチ程度、見ようによっては少々不気味とも思える、おそらくは目に当たる部分であろう大きなレンズを一つずつ、またそれぞれ五本の棒状の突起物が付いていた。それらは少女の言葉を理解したのか、音もなく浮かび上がり、すぐ傍の木の枝の間に身を隠した。

「そうそう！そこにいてね！……いいこと？ワタクシが帰ってくるまで、勝手に何処かへ行ってはダメよ？」と微笑みながら、少女は

早速館内へ向かった。

(……どうしたんだろう？……今日はよく聞こえないな……)

ミロにとって今日の生物館は妙に静かだった。希少生物はそれぞれ食事の時間がまちまちだが、いつもならこの時間……お昼の時間は生物達の空腹を訴える声がそこかしこからミロの脳に届くはずだった。

(……昨日の疲れが残ってんのかな？……あんまりやりたくないけど、仕方がないか)

疲れのせいにしても仕事にはならないので、今日はいつも以上に精神を集中していることにした。もっとも、それでも昨夜のテレパスよりはだいぶ楽だったが、ミロが集中し始めて無防備な精神状態となった時、まるで耳元で話されたような大声がミロの耳を貫いた。「あの、失礼しますけど……ここって博物館じゃありませんの？」「おわっっ!？」

ミロは思わず耳を手で覆い、声の主から離れながら言った。

「いつ、いきなり大声出さないでください!」

少女はムツと眉間に皺を寄せて抗議した。

「……失礼ですワね、ワタクシは大声なんて出してませんワ!」

「え……あ!……ご、ごめんね!感度上げてたから……」

ミロは頭を掻きながら、ばつが悪そうな笑みを浮かべて言った。

「その……入口にちゃんと生物館って書いてなかった?」

「……」

すぐに謝ったミロの態度をから、ミロが横柄な人間ではないと判断した少女は、一度ミロを軽く睨めつけてから言った。

「おかしいですワね……この地図にはほら、ちゃんと博物館って載ってますワよ?」

どうせ読めやしないだろうと冷やかしを込めながら、少女はひらひらと地図を振った。しかしミロは地図を掴み、一瞥してすぐに答

えた。

「どれ？……あ、ホントだね……でもこの地図どこの？すごい古いハードマップだね」

「……あらそおなの？……でもあなた、その字が読めるなんて博学ですワね」

照れているのかどうかよく分からない表情で、ミロは少女に答えた。

「え？……ああ、自分はこれでも学者だから、このくらいは」

「……学者さんですの？でしたら、誰よりもここについて詳しいですワね……うーん、決めましたワ！あなたに案内していただくことにします！」

「いや、決めたって……まあ、いいけど……」

少女の言葉ははじめからかなり一方的だったが、ミロはこの少女はきつとどこぞの要人の令嬢であろうと考え、咄嗟に案内を承諾した。少女は上機嫌な笑みを浮かべて言った。

「よろしいワ！じゃあ、そうですワね……まず奥から見学いたしましょう、奥から！」

「ちゃんとコースというものが……はい、わかりました、わかりましたよ」

少女に睨まれたということもあったが、生物館の経営は厳しいもので、ここで要人からの苦情でもあった日には来年度予算が激減しかねないと思ったミロは、案内が終わるまで全てこの少女の言いなりになることを決意し、まず一般公開されている地下一階から案内することにした。

「じゃあ、行こっか」

「っ！？」

ミロが突然少女の右手を取ったので、少女は驚き咄嗟にその手を振り解こうとしたが、何故かできなかった。ミロは少女が動こうとしないので、怪訝そうに尋ねた。

「……どうしたの？」

「な、なんでもありませんワ！……とっとと参りましょ！」と少女は頬を染め、照れを隠すかのように自らミロの手を引いて歩き出した。

「はあ……カレン様ともあろうアタイが、とんだドジ踏んだもんだ……」

額を流れ落ちる汗を拭おうともせず、カレンはそっと独り言ちた。既に包囲網は完成しつつあり、空港への逃げ道は完全に塞がれ、カレンは数人の署員とパトロボ共に囲まれていた。

（じじいに拾ってもらえねえんじゃ……どっかで船かっぱらうしかねえな……）

電波妨害を受けているのか、さっきから何度コールしても返信がなかった。しかし、ふとカレンは自分が大きな建物の敷地内にいることに気付いた。

（あん？……ここって……あの博物館か！……ラッキー！さっすがアタイじゃん！博物館ならスクーターぐらいあるだろ！……ついでに金目のモンでもいただいで、一石二鳥と行っか！）と思った時だった。

シュツツ！

「おわっとっ！」

気を抜いて立ち上がったカレンの頭上をイオンレーザーが掠め、カレンは慌てて地面に平伏した。

（あぶっっ！）

普段ポリスが所持しているレーザーガンは威嚇用であり、腕や足を一く二発貫通されてもどうと言うことはなかったが、頭を撃たれたら話しは別だった。

（くう……情けねえカッコ……これもゼーんぶクソジジがわりいんだっっ！！）と半泣きしつつ、カレンは地面を這いずりながら生物館の方へ向かった。

(……どうしたんだろ?……まあ、何かあったらみんなの方から言ってくると思うけど)

やはり今日に限って生物達はおとなしかった。いや、おとなしいと言うよりも、沈黙しているという風にミロには感じられた。

「ねえ?……ここにはドラゴがいるって聞いたんですけど、本当ですか?」

「えっ……た、単なる噂だよ、誰から聞いたの?」

唐突な質問にミロは慌てたが、一般公開されていないドラゴの存在は当然非公開情報であり、冷や汗をかきながら誤魔化した。しかし伝説の古代生物を一目見たいと思っていた少女は、残念そうに呟いた。

「なあんだ、やっぱり噂ですワね。……ドラゴなんているわけありませんワよね……」

ミロは少女にドラゴの姿を見せてあげたいと思いつながらも、まずは生物館に関する妙な噂を払拭しようとした。

「そうだよ……悪魔がいるなんて悪い噂がなければ、ここももっと流行ると思うんだけどね」

しかし次の少女の言葉は、ミロがここへ勤めてからはじめて聞いた言葉だった。

「あら……ワタクシが聞いたのは悪魔じゃありませんワよ?……ドラゴは天使のような美しい生物だって聞きましたワ……」

そして少女はミロの手を離し、少し悲しげな目を窓の外に向けた。人間にはあまり効果がないのでいつもならしないことだが、少女の悲しげな瞳が気になったミロは、テレパスの感度を少しだけ上げてみた。するとほんの微かに少女の切ない想いが伝わり、その想いはミロにも経験のあるものだったが、はつきりとはわからなかった。しかしふと少女の意識は変化し、ミロは現実を意識を戻した。少女はきよろきよろしながら少し不安そうな声で尋ねた。

「……何かしら？……サイレンが聞こえませんか？」

ミロが耳を澄ますと、確かに微かなサイレンが聞こえた。

「……本当だ……あれ、止まった……何かあったのかな？」

サイレンが止まったので、少女は安心して元気な声で尋ねた。

「……さあ！次は何処を案内していただけますの？」

少女の元気さにつられたミロも、元気な声で答えた。

「……じゃあ、ここは希少生物館だから、今度は稀少な異星生物を見よう！」

しかし少女は俄に目を丸くして驚いた。

「えっ！？……エイリアンを見ますの？」

「フフッ！もう見てるよ。俺だってこの星の人にとってはエイリアンだし」

少女はまじまじとミロの目を見て、怪訝そうに言った。

「……でも、あなたはエイリアンには見えませんワ」

少女の言葉にピンと来たミロは、はじめて少女を見た時に思ったことを口にした。

「……君はもしかしたら、基点星系の人？」

「あら、わかって？やっぱりこの髪の毛のせいかしら」と少女が自慢げにブロンドのお下げ髪を手の甲で跳ね上げると、光がこぼれ落ちるように髪がきらめいた。しかし、ミロはまるで興味なさげに苦笑しと言った。

「ううん……基点星系じゃ異星人と接触する機会がないから、異星人に対して……怖がるって聞いたことがあるから」

すると少女は途端にミロを睨めつけ、真面目な口調で言った。

「……聞いただけで、そんなことを仰るのは失礼じゃありませんこと？」

確かにその通りなので、ミロは素直に自分の偏見を認めた。

「ごめんごめん！……ただ、ここは昔どこかの星にあった「動物園」とは違うってことを言いたかっただけ……」

その「動物園」を少女は本で読んで知っていたが、ミロが言いた

かったことはよくわからないので、自分が感じた疑問だけを述べた。
「……でも、あまりかわりないみたいですわね？」

少女がわかってくれたと思ったミロは、少女の疑問を言葉通りに捉えて答えた。

「……そうなんだよね……いくら透明でもやっぱりこの隔壁がイメージ悪いんだよね……ここの生物達のほとんどはこっちから干渉しない限り危険はないのに……まあ、見学を続けよう！」

そしてミロ歩き出したが、ミロはどうして自分がこんな少女に愚痴混じりのことを言ってしまうのか、自分でも不思議に感じた。

一方、少女が「かわりない」と言ったのは、実のところミロ本人のことだった。ミロの髪は自分の瞳とよく似た薄いコバルトブルー系で、ミロの瞳は鮮やかなオレンジ色をしていたが、それ以外は自分と何処も変わらないので、少女はどうしてもミロがエイリアンには見えなかった。しかしこの星の人間とも違うので、はじめて見た時から気になっていたのだが、話しも気持ちも何となく通じている気がして、少女はこの青い髪のお兄さんと話すのが楽しいと思った時だった。

ドオオオンッ！

突然大きな音と振動が響き、建物全体が激しく揺れた。

「キャアッ!？」

揺れが激しくバランスを崩した少女を、ミロは咄嗟に抱きかかえたが、少女はその行為に抗議の声を上げた。

「はっ……放してですワッ!」

しかしミロは眉を顰めながら、たった今降りてきた階段を見ながら言った。

「あ、うん……ちょっと見てくるから、ここを動かないでいて!」
そしてミロは、少女を降ろして駆け出した。

つづく

ACT. 3 声

「あっ！それ遺跡っ！」

「ほあっと！」

生物館の館長から怒鳴られた署長は、てっきりスツールと思って腰掛けた石から慌てて腰を上げ、額に青筋を立てつつ愛想良く謝罪した。

「ハハッ、ごめんなさい！」

「……気を付けてくださいよ！……あれも、あっちのも遺跡なんですから！」

（ならこんな通路に如何にも「座ってくれ」って感じで置いとくんじゃないわよっ！）と思いつつ、署長は深い溜息をついて項垂れた。カレンが署の管轄内にある生物館に逃げ込んだという報告を受けた時、署長は目眩がした。生物館は貴重な遺跡でもあり、更に中には希少生物がわんさかいるので、カレンは実に厄介な場所に逃げ込んでいた。直ちに生物館に避難命令を出したが、時既に遅く間拔けなパトロボが生物館の遺跡に無数の風穴を明けまくっていて、生物館の館長は素直に避難命令を聞くどころか、「攻撃を止めさせろっ」と怒り狂っていた。

そして現在、生物館の中央ホールに駆けつけた署長はとりあえず館長をなだめつつ、入り口以外の全てのドアと窓をロックするよう依頼したところだった。幸い平日の午前中で入館者は数人であり、パトロボの破壊活動を見た時点で全員勝手に逃げてくれたので、今のところ被害は遺跡の穴だけだった。署長は自分の前に佇む五人の無能な署員達にうんざりした顔を向け、溜息混じりに小声で言った。

「はあ……私さ……パトロボに任せるなって、ちゃんと言ったよね？……」

「……………は」

「……こーなったらカレン捕らえないと、減俸じゃ済まないからね？いいわね？」

「はっ！」

貴重な遺跡と無能な部下と珍妙な生物達に囲まれながら、いくら叱りつけてもけして悪怯れることのないパトロボ共をぼんやり眺めつつ、さてどうしたものかと途方に暮れかけた時だった。

「……セーンプイツ！」

「うわっ!？」

突然署長は後ろから抱きつかれたが、そんなことをする人物は一人しか心当たりがないので、落ち着き払ってその人物に言った。

「……ケイ、勤務中よ。離れなさい」

しかしケイと呼ばれた長髪で童顔の女性警官は、署長から離れた後、署長の顔を覗き込んで尋ねた。

「怒ってるの?……怒ると皺が増えちゃうって、昔お婆ちゃん言ってたよ?」

途端に署員達が吹き出し、署長は眉間に皺を寄せて猛然と署員達を睨めつけた。そして腰に手を当てながら、ケイという親友でもあり妹みたいな存在でもある部下に向かって厳とした声で言った。

「……今は、勤務中!おちゃらけは……」

しかし、その時ケイの向こうに見えた天窓の格子の影が動いたのを、署長は見逃さなかった。

「上よっ!」

「!？」

一斉に天井を見上げた全員の目に空中に浮かぶバケツが映り、全員が(……え?)と呆氣にとらた瞬間だった。

ドドドッ!

「うっ!？」

「っ!？」

バケツが目眩ましであると署長が気付いた時には、ケイと署長の前にいた三名の署員が短い唸り声を上げて床に沈んだ。そして耳障

りな音を立てながらバケツが床に落ちると同時に署長は「防御っ！
！」と叫んで左腰の銃に手を掛けたが、敵はケイと署長に向かって
もう一人の署員の背中を勢いよく蹴りつけた。

「ぐあっ！？」

「きゃあっ！？」

しかし署員にぶつかったのはケイだけで、署長はどうにかそれを
避けた。そして既に遺跡の影に向かって走る敵に向けて引き金を引
いた。

ドシュッドシュッ！ドシュッドシュッドシュッドシュッ！

しかし、丁度その時戻ってきた館長が悲鳴を上げた。

「……ああっ！？いっ、遺跡がっ！」

「ゴム弾だから大丈夫よっ！下がってなさいっ！」

ところがたとえゴム弾であれ、カレンが飛び込んだ物陰を正確に
四発も撃てば話しは別だった。

メキッ……メキッ……ミシミシッ……

「……え？……ちょ……ケイっっ！逃げてっ！」と署長はまだ倒れ
ているケイに向かって叫んだが、その声は「あーっ！あーっ！
と騒ぐ館長の声で掻き消され、ケイは「……はえ？」ときょとんと
しながら館長と署長を見比べた。

「もうっっ！！」

「ふわっ！？」

署長はケイの胸ぐらとその横で伸びている署員の襟首を掴み、渾
身の力で引き摺った。

ドドオオオオッ！

凄まじい音と振動を轟かせ、高さ六メートルの巨大な石像が倒れ
た。幸い署長達とは反対側に転がったので、署長達は床の細かい破
片を少し被っただけで済んだが、署長が安堵の吐息をついた直後、
館長がまた悲鳴を上げた。

「……なっ……なんてことを……修復にいったいどれ程金が掛かる
と思ってるんだっ！？」

（知るかつ！こんなボロ遺跡修復しなくたっていいわよっ！）と思いつつも、署長はカレンの姿を追っていた。すると署長の後方から盛大なくしゃみが一発、ホールに響いた。

「ひつつくしゅんっ！」

「!？」

全員が振り返ると、そこには埃にまみれたカレンが立っていた。

カレンは「ぺっ！ぺっ！」と唾を吐いてから、署長を睨めつけて怒鳴った。

「……この腐れアマっ！アタイを殺す気かっ!？」

（……腐れアマ？）と署長が顔を引きつらせながら何か言い返そうと思っている内に、カレンはまた物陰に隠れてしまった。しかし倒れた石像によって入り口が完全に塞がれていたので、とりあえず今すぐ逃げられる心配は無いと考え、署長はゆっくり立ち上がって言った。

「あー……ロボ起動。カレンを包囲」

攻撃を禁じられ立ち尽くしていたパトロロボ達は、一斉にカレンが隠れている大きな遺跡を取り囲んだ。署長はここでパトロロボをけしかけて煙り出そうかと思ったが、判断力が遅いパトロロボが至近距離でカレンに敵うはずもなく、何よりこれ以上の損害は避けたいこともあり、懐柔策に乗り出した。

「……あー……一匹狼・女海賊カレンに告ぐ。もー逃げられないわよ？それとも、みんな殺して逃げる自信ある？」

「……」

カレンは答えず、署長は続けた。

「……あのね、あんたには殺傷許可出てるの。でも、おとなしく投降してくれたら、命は助けてあげるわ」

するとカレンは今度は猛然と捲し立てた。

「……嘘付くんじゃねーよっ！出てったら撃つくせによっ！それにその一匹狼っての止めれってんだっ！アタイは虎だっつの！バーーカっ！」

「バツ……」

署長は目を見開き、そのままケイに顔を向けたが、さも愉快そうに含み笑いをしているケイを見た瞬間、署長の中の何かが切れた。

「あー……一匹狼・カレンに警告する。三〇秒以内に投降しなきゃ一斉ショットするわね」

途端に館長が「ちよつとっ！これ以上……」と言い掛けたが、館長は署長の形相を見て黙ってしまった。

（……マジかよっ！？）

自分に殺傷許可が出ている事は先刻承知だが、カレンは署長の言葉が冗談には聞こえなかった。そしてカレンが（奥へ逃げるか？……袋の鼠になるのがオチか？）と迷った時だった。

「冗談だろっ！？ここを何処だと思ってるんだっ！」「！？」

カレンの二〇メートル程後方で、ミロが声を張り上げた。地下から上がってきたミロはカレンが最後に毒づいた時から聞いていたが、カレンも署長もどちらも本気で話していることを一瞬で悟り、一斉ショットなどされたら逃げ場のない周りの生物達はひとたまりもないと思った瞬間、ミロは叫んでいた。しかし突然現れたミロの存在は、カレンにとって突破口だった。

（まだ人がいたのか！）と思うや否や、カレンはミロの目の前に猛然と迫っていたが、カレンの接近に驚いたミロの腕をカレンが掴みかけた時だった。

【誰っ！？】

「っっっ！！」

それはカレンの心に直接響く、ミロの心の声だった。焦ったカレンは腕を掴み損ね、勢い余ってミロを通り越し、もんどりを打って床にしたたか背中を打ちつけた。唐突な展開に啞然としながらも、署長はこの好機を逃してなるものかと思ったが、あろうことかミロは転んだカレンに駆け寄った。カレンは背中をさすりながら、ミロよりも署長に向かって言い放った。

「腐れアマっつ！テレパスまで呼びやがったのかっ!？」

しかしすぐに、【大丈夫!？」という心から心配する声がカレンの心にぶつかってきて、カレンは頭を振って叫んだ。

「大丈夫だよっ!」

「!？」

自分の思念に生まれてはじめて直に答えられたミロは、状況を忘れて尋ねていた。

「……聞こえるの？」

「……あゝ？」と苛立たしげにカレンが答えた時だった。

「!？」

たった今自分が上がってきた階段からひょっこり出た顔を見て、ミロは思わず叫んでしまった。

「来ちゃダメだっ!」

（……え？）と少女が思った時には、少女は既にカレンの腕の中にいた。そのあまりの素速さに、ミロも署長も言葉を失っている、カレンは呆然とする少女を左手で背後から抱きかかえ、右手を少女の顔の横で開き、不敵な笑みを浮かべて言った。

「さあ……ご覧あれ……」

そしてカレンが右手をくねらせると、次の瞬間右手には、刃渡り一〇センチほどの不気味に光る内反りのナイフが握られていた。

「おーっすごーい!」とケイが拍手をしたが、署長は敢えてそれを無視してカレンを睨めつけたまま言った。

「へえ!……さすがは一匹狼……見事な手際ね!」

カレンはにやりと口元を歪めて答えた。

「はっ!狸ばあが良く言うぜ……アタイは船が欲しいだけだ。三分以内にこの博物館にある船を用意しろ!宇宙用のスクーターでもいい!……三分超えたら、このお嬢ちゃんのおめめを抉る……四分超えたら、そのあんちゃんの……」と言い掛けたところで、カレンの言葉は我に返った少女の、「まあっ!？」という可愛らし驚きの声に遮られた。呆氣にとられた面々を余所に、少女は慌てながら

カレンに言った。

「なっ、なんてことを!? 早く刃物をしまいさいなっ! お早くっ!」

しかし、そう言いながらも腕の中で暴れようもしない少女に違和感を覚えながら、カレンは怪訝そうに尋ねた。

「……お、お前自分の立場わかってんのか? おとなしく……」

「いいからお早くっ! でないとガーディアンがっ……あっ!」と少女が叫んだ時には、既にカレンのナイフが赤く輝きどろどろと溶け始めていた。

「おわっっ!? 熱いっ!!」

「キャッ!」

カレンはたまらずナイフを放り投げたが、その拍子にカレンの片方の髪が解け、髪の間から大きな三角形の物体がびよこつと飛び出した。

（……耳?）と全員が思ったが、署長は左手でパトロボに合図を送りながら言った。

「……やっぱり狼じゃない!」

「うっせーっ! アタイは虎だっ!!」

しかし、少女がカレンを睨めつけながら、「だからしまいなさいって言ったのにっ! もうワタクシは知りませんワっ!」とそっぽを向いた時だった。

「!!!!」

突如として目の前に現れた金と銀の球体に驚いたカレンは、咄嗟に四メートル後方の壁際まで一気に飛び退いた。

「キャッ!」

「なっ、なんだよこの目ん玉!」

それは少女がこの生物館へ入る前に生物館の外の樹木に隠れさせたガーディアンだったが、それを説明する代わりに少女は解決策を提案した。

「……は、早くワタクシを降ろして、すぐに謝りなさいませっ!」

「あ、あや……おわああっ!？」

球体の目の色が俄に変化して、それが恐ろしかったカレンは慌てて少女を球体の方へ放り投げた。

「キャアツツ!？」

しかし球体の触覚から放たれた無数の光る糸が、少女をそつと受け止めた。そして球体は瞬く間に少女を光る糸で繭化していった。

(……な……なんなの?これ……)

信じがたい光景に署長は思考を奪われかけたが、ぶるっと頭を振って意識をカレンに無理矢理戻した。カレンは自ら壁際で孤立してくれたが、ネット弾が使える距離ではなく、人質までとった以上もはや何をするかわからないし、ぐずぐずしていたらまた逃げられちゃうし、遺跡なんてもうどーだっていいけど、でもこの丸いのはちよつと怖いし、これ以上考えたら頭がパンクしちゃうわよっ!と署長が叫びなくなった時、今までおとなしくしてくれていたケイが、思わぬ言葉で署長の背中を押した。

「……わかったっ!!センパイッ、その子ってほらっ!搜索願いでてる子!リンダ嬢っ!!」

(……ってことはガーディアンかつ!っていうかそー言ってたじゃないっ!)

「頭は外せっ!構えっ!!」

「っ!？」

カレンが号令に反応した瞬間、署長とミロが同時に叫んだ。

「撃てえっ!!」

「待てっ!!」

幾筋ものレーザーがカレンの胸から下を貫通して、遺跡の壁までも貫通した。カレンの足や背中から赤い糸のような血が無数に飛び散り、床に赤い斑点を描いた。カレンが崩れ落ちる姿を瞬きせずに見ていたミロは叫んだ。

「……撃つことないだろうっ!!!!」

その瞬間、生物館全体を震わす地鳴りが轟いた。
ゴオオオオオオッ!

「っ!?!?……なに?」

そして今まで静まり返っていた生物達が、一斉に唸り声を上げ始めた。

ゴアアアアアッ!!

(う、うるさいっ!! いったいどうしちゃったのよ!?) と署長が耳を塞いだ時、血まみれのカレンが蠢いた。

(……まだ動けるの?)

「がっ!……がはっっ!……このお……」

カレンは口から大量の血を吐き出し、がくがくと震えながら片膝をついて立ち上がった。そして目を見開き署長を睨めつけながら両手首を回した瞬間、カレンの指の間には八本のナイフがあった。

「!?!?」

その凄まじい形相と執念に、純粋な恐怖を覚えた署長は咄嗟に右腰の銃を構え、カレンの眉間を狙った。しかし、引き金を引くことはできなかった。

「………どきなさいっ!」

「……」

署長が銃に手を掛けた時、ミロは迷わず署長とカレンの間に歩み出していた。ミロはカレンに近寄り、五本のナイフを握るカレンの左腕に触れながら、怒りに燃えるカレンの目を真っ直ぐ見つめた。

「どきなさいっ!! 聞こえないのかっ!?!?」

ミロには聞こえていた。

【痛い………苦しいよ………】

ミロには、子供のように震えるカレンの心の声がずっと聞こえていた。しかしミロは、もはやどうすることもできないことを知っていた。

【アタイ………死ぬの?………今死ぬの?………】

【……大丈夫……死なないよ】

【「こんなに……苦しいのに？……じゃ……後で死ぬの？」】

【「だから、死なないって」】

「ガハアツツ！？」

「！？」

突然カレンは血を吐き散らし、ミロの手を振り解いて左手のナイフを署長に猛然と投げつけた。ナイフは幾体かのパトロボに突き刺さり、署長の髪を掠すめた。そして署長は反射的に引き金を引き、レーザーはミロの首筋を貫通して、一拍おいてパトロボ達が応戦モードに切り替わった。

それでもミロは咄嗟にカレンの身体を庇い、薄れ行く意識の中で（……もういいや）と思った。カレンが撃たれた時、壁の向こうにいた大勢の生物達も撃たれ、これはそれを救えなかった自分への報いだと思った。せめてもの救いは、ブロンドの少女がどうやら無事であるということだが………いったいなんでこんな事になったのだろう？全てがあまりに急で、何をどうすればよかったのだろうか？……いや、考えたって………もう………。

（………約束………ごめん………エル………あ………できたら………変わりに………ドラーゴ………）

「撃つなっっ！！」

その署長の絶叫は、遠くから聞こえてくるようだった。

つづく

「……ご、ごめんなさい……ごめんなさい……」

オレンジ色に光るドラゴの目が自分を見ていたと思った署長は、咄嗟に本気で謝っていた。しかし急にホールが暗くなり、ミロ達が倒れている壁際の床が怪しく輝いたかと思うと、ミロとカレンは光りに包み込まれた。その瞬間を呆然と見ていた署長が（……え？）と思うと同時に、またドラゴが吠えた。

グアアアアーーーーッ！！

「！！！！」

しかし署長は耳を塞ぎながら立ち上がり、署員に向かって一喝した。

「やめろっ！撃ち方やめっっ！！」

署長はミロとカレンを見た時、ドラゴの向こうの壁面に遺跡の影が写ったことに気付いていた。そしてよく見るとドラゴは半透明であり、署長はドラゴが実体ではないと判断した。

「幻だっ！撃つんじゃないっ！！……ほらケイ、撃つなっば！天井落ちちゃうじゃないっ！！」

ミロはカレンに覆い被さりながら震えていた。それは署長達が見ているドラゴをミロも見たからだ、同時にミロはカレンの鼓動を感じて少し安心した。しかし、ふとミロは署長達もレーザーも、周りの何もかもが止まっていることと、それを見ている自分自身に気付いて頭が真っ白になりかけた。

（……………??）

ものを考えている以上は自分が生きていると思ったが、ミロにはよくわからなかった。そしてカレンもまだ生きていると思ったが、周りは止まっているので、ミロはおかしいのが自分なのか周りなのかさっぱりわからなかった。しかしミロは一度ぶるっと頭を振って、とにかく今はカレンを病院へ運ぼうとカレンの身体を抱きかかえた、その時だった。

【……ミロよ……】

【っ!?!】

不意に、懐かしい声がミロの脳を直撃した。そしてそれは昨夜聞いたばかりの声であり、咄嗟にミロは辺りを見回しながら、思念で叫んだ。

【いつ、遺跡!?!……えっ!?!】

【……そうだ……】

【!?!】

しかし今のミロには、他にすべきことがあった。

【ごっ、ごめん!今話している場合じゃないんだ!この人病院連れて行かなきゃならないし、ドラゴが……】

【そのドラゴは私だ……】

【………へ?……遺跡が?……え?……な、なんで??!】

あの綺麗な波紋を見せてくれる遺跡とこの巨大なドラゴが、ミロの中ではかみ合わなかった。ミロは混乱する頭を必死に抑えながらカレンを助けなければと思ったが、遺跡はすぐにミロの疑問に答えた。

【……私はより多き者の心を映しているだけだ……】

【……心?】

そして遺跡はミロの心をくすぐるような、少し愉快そうな声で続けた。

【……そうだ。ここに在る者共は、私をこの様に考えていたのだろう。……ミロよ、お前はあの深い暗闇の中で……ドラゴをどう見ていたのか、思い出してみよ】

【……どうって、ドラゴは……基点星域のチビトカゲみたいなの……あっ】

もしもこの巨大なドラゴがドラゴの本当の姿であるなら、チビトカゲと言われて怒るかもしれないとミロは焦った。しかし、遺跡は愉快そうに笑って答えた。

【……フッフッフ……そうか、私がチビトカゲに見えていたのか】

【いや、でも……だって……】

【……言ったらう……映しているだけだ……お前のドラゴは、お前が見ていた通りの代物だ……】

小さなドラゴと巨大なドラゴが同じであっても、それらが同時に遺跡であることがどうしても飲み込めないミロは、それを率直に尋ねていた。

【……あの……わかんないよ……ホントに遺跡なの？】

すると遺跡はまた愉快そうに答えた。

【……フフ、そうだ……だが今はわからずとも良い……】

【……】

その「今」という言葉が、ミロを現実に戻した。周りを見てもまだ全てが止まっているような状態だったが、とにかく一刻も早くカレンの手当をするために、ミロが遺跡に別れを告げようと思った時だった。遺跡はミロに優しく語りかけた。

【……ミロよ、お前に沢山のものをもらった礼に、お前が今望むモノを授けよう……】

ミロがドラゴにあげたものは、星の形をした故郷の石、基点星域の小さな赤い珊瑚の欠片、エルの瞳と同じ色の赤いガラス玉など、子供でも欲しがらないようなガラクタだった。しかしどれもミロにとって大切な宝物であり、はじめの内ミロは後で返してもらおうつもりで、それらをドラゴに貸していた。ところが会う度に消えていて、残念ながらもそれがとても不思議だと思っていたミロは、やはり会う度に何かをあげていた。しかし今はただ、早くカレンの手当てがしたかった。

【いっ、いいよ！俺は何も……わっ！？】とミロが断った瞬間、腕の中のカレンが震え出した。そしてレーザーに打ち抜かれたカレンの胸の穴が見る間に塞がり、衣服や髪さえも再生し、血痕も消えてしまった。

【………凄い……】

驚きながらも、ミロはすっかり元通りになったカレンを見て深い

安堵の吐息をついて、遺跡に礼を言おうとした。しかし、遺跡は続けた。

【……もう一つ、私の身体を授けよう】

「……………へ？」

あまりのことに思考を奪われ、ミロは思わず声を発していた。しかし、猶も遺跡は続けた。

【……お前が幾度も美しいと言った、私の身体は「タレス」という……お前が望めば如何なものにもなろう】

ようやく思考を取り戻したミロは、遺跡の言葉を頭で反芻しながら慌てて断った。

「いや、あの……ダメっ！そんな、遺跡はもらえないよっ！」

しかし、遺跡は愉快そうに答えた。

【フッフ……あれは……私は既に、お前のものなのだ……】

たとえば遺跡本人の言葉であれ、ミロにとって遺跡は私物化するものではないので、ミロは切に断り続けた。

「こ、この人を治してくれてありがとう！それでもうっ、これだけでもいいですっ！これ以上何もいらさないから！」

しかし、遺跡はお構いなしに続けた。

【……欲しくば、ただ「タレス」と言うがよい】

「いやだから！欲しくないから！」

【……フフ、もう私は消える……幸い私を継ぐ者もこうして現れた……】

「!？」

突然ミロの胸に強い別れの意味が流れ込み、同時に遺跡の気配が急速に薄らいだ。

「ちよっと！そんな勝手に消えないでっ！待って!!！」

【……ミロよ……お前の願いは、お前が強く望む限り……叶う……】

「待っ……っ!？」

遺跡の意識が完全に途絶えた直後、止まっていたミロの周りが一斉に動きだし、ミロは咄嗟に身を竦めた。そして署長の怒鳴り声が

響き渡った。

「……ほらケイツ、撃つなってば！天井落ちちゃうじゃないっ！！」
「！？」

ミロは反射的に天井を見上げたが、その時一瞬にしてドラゴの姿が消えた。そして、「あーっ！！」という女性の声に驚いたミロが声の方へ目を向けると、署長とケイがミロを指さして口をぽかんと開けていた。ドラゴの幻と光りが消えたと同時に現れたミロを見て、署長は驚きのあまりすぐに言葉が出なかった。

「……な……え？」

「……いや、あの……」とミロも答えあぐねていると、頭上からガコツという音がして、全員が一斉に天井を見上げた。

「おわっ！？」

「ヤバッ！？ケイ！逃げて逃げて！！」

「きゃーっっっ！」

ガラガラッ、ドーンッ！と、天井の一部が崩落した。ミロはカレンを壁の方へ向けて庇ったが、幸いにも天井はミロと署長達の間で落下した。そしてこの時ミロは、改めてカレンをどうしようかと思っていた。気を失っている今の内に引き渡しても良かったが、もしすぐに目覚めて、またあの惨劇が繰り返されるのは避けたかった。そこでふとミロは、「逃げて」という署長の言葉通りにするのも悪くないと考えた。

（でも逃げるって……どうやって……）

不思議なことにその考えに迷いはなく、むしろミロは自分が逃げ道を探しているのがなんだか愉快だった。そしてその時、腕の中の眠り姫が目覚めた。

「ん……朝か？……」

「フフ……朝じゃないけど、おはよう」

「……あ？」

眠り姫は手の甲で目を擦ってミロを見上げ、そして自分がミロに抱えられていることを知った。

「ニヤんっっ!?!?!?!おっ、降ろせっ!どこ触ってんだ早く降ろせ今すぐ降ろせーっっ!」

意外にもカレンは暴れず、ミロの腕の中で身を竦めてきつく目を閉じながら叫ぶだけだった。ミロはその反応に戸惑いつつ、苦笑しながら答えた。

「いや重いし、降ろすけどさ……ここどこだかわかってる?」

「?……ゲッ!?!」

カレンが恐る恐る目を開けると、幾つもの銃口がこちらに向けられていた。

「う……動くなっ!」

ミロもカレンも特に動いていないが、署長は無意識にそう叫んでいた。まだミロが生きていることに驚いたまま天井が落ちてきて、慌てて逃げたら今度は元気なカレンの声が聞こえてきて、署長はもう走って家に帰りたいと思うほど頭が混乱しかけた。しかし話し合う二人を見た瞬間、その混乱の大部分は大きな安堵に押し流され、代わりに安堵交じりの奇妙な怒りが胸に込み上げてきて、署長は左腰の銃を構えて言った。

「……なんで生きてんのか知らないけど、ほんっつとに往生際の悪い狼ねっ!おとなしくお縄につきなさいっ!……あとお前っ!その狼を早く降ろしなさいっ!」

カレンはミロに抱かれたまま、猛然と言い返した。

「狼じゃねえっ!ぶっ殺すぞこん腐れアマっっ!」

しかしこれ以上同じことを繰り返したくないミロは、息を吸い込んでから心で叫んだ。

【それより逃げるんだろっ!?!どうやって逃げるのさっ!?!】

「!?!」

驚いたカレンは我に返って何故か素直に「船」と答えようとしたが、「よしっ」と呟いたミロを見て戸惑った。目の前の男はさっきとはまるで違う覇気のある目をしていて、その気迫がカレンの胸に響いてきたからだが、そう言えばこの男はテレパスだったとカレン

が思い出した時、ミロはありったけの願いを込めて声を張った。

「タレスッ！」

「……？」

一瞬の静寂の後、気でも狂れたのかと全員が思った時だった。

ゴゴゴゴッ！

「！？……ちよっ、地震っ！？」

「キャアーっ！！」

激しい震動と同時に床が割れて、割れ目から大量の水が吹き出した。

「いっ！？」

その水は驚く暇さえ与えず署員達をなぎ倒し、ミロとカレンの目の前で竜巻状の水柱になり、カレンはミロに爪を立ててしがみつきのながら叫んだ。

「みっ……みずうーっ！？」

理由はさておき、水はカレンにとって最も苦手な物質だった。カレンは手を洗う時でさえ水は使わず、水を飲む時は必ずストローを使うほど、とにかく水が身体に触れるのが生理的に嫌いだった。しかし、ミロの強烈な意思がカレンの胸を直撃した。

【船ってどんな船さ！？】

「っっ！？まっ、またてめえかよっ！？船より水だろっ！！水が見えねえのかよっ！！」

あまりに強い問い掛けに、カレンは反射的に言い返していた。しかし、ミロは容赦ない思念で問い詰めた。

【水はいいから、早くどんな船かイメージして！俺は船ってよく知らないんだ！！】

もはやカレンは水に気を取られ、聞かれるがまま答えながら迫り来る水の恐怖と戦うしかなかった。

「ああもうっ！シンプルで速い奴だよ！！……っ！かオイッ！水が回ってんだよっ！！どーにかしろよっ！！早く逃げてくれよっ！！」

しかし、【……見えた】というミロの思念が聞こえた瞬間、バシユッ！という音と共に、あらゆる方向から更なる水が矢のように飛び込んできた。

「うニ、ヤーッッ！！！」

そして水柱は巨大な竜巻と化して天井を突き破り、およそ二〇メートルの高さまで昇った。

「……………」

かろうじて水から逃れた者達が呆氣にとられる中、カレンはその水柱を震えながら見上げつつ、この現実を否定しようとした。

【……これは水じゃない……これは夢で……アタイは今寝てる……】しかし、ミロはそれを許してくれなかった。

【ダメだっ！もっとちゃんとイメージしないと船にならないぞっ！！】

【……なに言って……】という思いを最後に、努力の甲斐があったのかカレンは意識を失った。しかし気を失う寸前、カレンの鮮明なイメージがミロの頭に飛び込んできた。

（……それでいいの？……いっか！！）と思うなり、ミロはもう一度叫んだ。

「タレス！」

ゴオオオオオッッッ！！

瞬間的に激しく回転した後、水柱は特徴ある形状に変化していた。そしてミロを含め、それを見た全員が同じことを思った。

（……………瓶？）

それは誰が見ても半透明な黒っぽい瓶であり、直径約五〜六メートル、全長約十五メートルはあろう巨大な瓶が逆さに浮かんでいる様は、なんとも不安定な印象だった。

つづく

ACT. 5 脱出

(……こんな船に……乗ってるんだ……)

などとぼんやり思いながら、ミロはカレンを抱えたまま床に両膝をついた。そして顎から滴る汗がカレンの顔に掛かった瞬間、たった今気を失ったばかりのカレンが飛び起きた。

「……おわっ!? なんだっ!?」

カレンは頭上の物体には気付かず、ミロの顔を見て驚いた。ミロは明らかに憔悴した顔をいていたが、それよりもミロのオレンジ色の瞳が暗く濁っているのを見たカレンは、何故か激しい焦りを感じた。

「……オイ、どうしたんだよ!？」

ミロは弱々しく微笑んで答えた。

「……大丈夫……ちょっと疲れた、だけ……あとは君に、やってもらうよ……」

「……あ?」とカレンはミロの視線を追ったが、次の瞬間「うっ!」と呻いて身を竦めた。そしてその見たこともない巨大な物体を呆然と仰ぎ見ながら呟いた。

「……な……」

しかし、「ちよつとケイっ! ケイってば!」という署長の声が響き、咄嗟にカレンはミロを掴んでもの影に身を潜めた。そしてミロの胸ぐらを掴みながら、浮遊する巨大な瓶を見て囁いた。

「……こ、こりゃなんだ? ……まさか、お前が出したのか?」

ミロは眩しそうな目をして、か細い声で答えた。

「……君の、船だよ……」

それは何故か嘘には聞こえず、カレンは眉間に皺を寄せて呆れたような驚きの声をあげた。

「はあっ!? ……このバカでけえ瓶が船かよ!? ……つかアタイの船ってなんだよ?」

「だから、君の船さ……君のイメージで……俺が作った……」

「……作ったあ？……ってオラッ！」

ミロの身体が大きく揺れて、カレンは思わずミロの身体を支えた。
「しっかりしろっ！」

ミロはきつく目を閉じて、一度息を吐いてから言った。

「とにかく……これは君の船だ……君なら……乗れる……これで……」

ミロは喘いで最後まで言えなかったが、残りの言葉はカレンの頭に届いていた。そして何故かミロの言葉は、最初から疑う余地のない言葉としてカレンの心に響いていた。

「……よしっ！！……んで、どーやって乗るんだよ？」

ミロは目を閉じたまま呟いた。

「今……作る………タレス………」

「作るって……オッ！？」

瓶の首の部分が輝き、瓶の中で幾何学的な光る模様が現れた。カレンがその綺麗な模様に魅入っていると、五秒ほどで模様が消えて手のひらサイズの小さなハッチがカシュッと開いた。カレンは青筋を立てながらミロを睨めつけて言った。

「……おい、アタイは小鳥か？……うおっと！」

しかしミロは倒れかけ、カレンはミロを抱き起こして言った。

「オイッ！しっかりしやがれっ！！逃げんだろ！？」

「……ダメだ……目眩が………」

「男のクセに弱音吐くんじゃねえっ！！ほらっ、もう一回やるぞっ！」

「……」

しかし、ミロの限界は疾うに過ぎていた。ミロはガクリと項垂れ、カレンはミロの身体から生気が抜けて行くのを感じた。

「……どうした？……オイッ！手伝ってやるから、どうやったらいいんだよ！？」

カレンはミロの肩を乱暴に揺すったが、ミロは力無くカレンの胸

に倒れた。

「オイッッ!! 寝んのはまだ……」

ミロを抱いた時、不意にカレンの胸に死の匂いが広がった。そして自分がついさっき死にかけたことを思い出したカレンは、その恐怖を怒りに変えて叫んだ。

「起きろっ! 起きろってばっ!!……」

しかし死の匂いは消えず、ミロの閉じた目から滴が零れ落ちた瞬間、カレンは無意識にミロを抱きしめて絶叫していた。

「起きやがれーっっっ!!!!」

ガゴッッ!!

「っ!?!」

咄嗟にカレンが振り返ると、巨大な瓶の首が縦にパツクリ割れて迫って来ていた。

「……ニヤっ、ニヤーっ!?!」

そして瓶は、そのままミロとカレンを床ごと飲み込んだ。カレンの叫びを聞いたミロは、薄れ行く意識の中で（乗るんじゃないかって、船が乗せれてくれたらいいのに）と都合のいいことを考えながら気を失った。そしてその願いは叶えられ、瓶は音もなく浮上し始めた。（……な……なんなのよ……）

カレンが何かを喚いていたのは聞こえていたが、署長は水を被って気を失ったケイの介抱に気を取られ、カレン達に構っていられなかった。しかしケイが意識を取り戻すと同時に巨大な瓶が動き出し、瓶はまるで生き物のようにカレン達を飲み込んで浮き上がった。

「センパイ……瓶が……飛んでる……」

「……うん」と頷いて、署長はケイの顔色を確かめながら尋ねた。

「ケイさ……瓶型宇宙船って……あーゆるんじゃないよね?」

ケイは空を見上げながら答えた。

「うん……だってあれ、瓶だよ」

「………だよねえ」

その瓶は逆さのまま、ゆっくり空へ昇っていった。

何度か引いてみたが無理だと判断した少女は、腕を組んで覚悟を決めてから言った。

「……もし……もーしっ!……ちよいとネコさんっ!その大き
くて重いお尻をすぐさまどけていただけませんこと?」

「……ん?」

カレンが少し動いたのもう一度引いてみたが、やはりどうにも
ならないと思った少女は息を吸い込んで声を張った。

「ネコさんっ!あーなーたーのっ、おーしーりーがつ、ワタクシの
スカート裾を踏んでますのっ!」

「……あ?」

カレンは手の甲で目を擦りながら、寝ぼけ眼を声の主へ向けた。
そして一度近づいて少女の顔をよく見て、ゆっくり離れてから怪訝
そうに呟いた。

「……なんでおめえがいるんだよ?……」

目の前にいる金髪の少女は確かに見覚えがあり、拉致しようとし
た記憶も残っていた。しかしはつきり思い出そうとすると様々なこ
とが断片的に浮かんできて、カレンは軽く頭を振りながら記憶を整
理した。その拍子にカレンのお尻からスカートが抜けて、少女はス
カートの皺を手で伸ばしながら不機嫌そうに答えた。

「そんなこと知りませんワよ!気が付いたらここにいたのですワ!」

そしてカレンは(……そーいやアタイ……瓶に……)と最後のシ
ーンを思い出し、同時に青い髪の男を思い出して辺りを見回した。
カレン達がいる場所は薄暗い通路のような場所だったが、どこにも
男の姿はなく、突然カレンは少女の胸ぐらを掴んで言った。

「っ!?!?」

「オイ、てめえ……」

しかし少女は「ストップ!」とカレンの鼻に右手を当てながら、
右手で自分の頭上を指さして素っ気なく言った。

「……学習能力がありませんの？」

「あ？……」

カレンが顔を上げると、頭上には金と銀の球体がふわりと浮いていて、カレンは座ったまま器用に後退って言った。

「おわっ！？こっ、こいつらもいたのかよっ！？」

少女は襟を正しながら、愉快そうに答えた。

「フフッ……ワタクシのガーディアンですもの、当然ですワ」

カレンは顔をしかめて、思ったことをそのまま口に出していた。

「あ、アタイこいつら嫌いだ！……でっけえ目玉みてえで気味わりつたらありやしねえ！」

少女は一度眉を顰め、それから顎を突き出して素っ気なく言った。
「まあ、気の毒なネコさんですワ……この愛らしさがわからないなんて……」

「あゝ？……そーいや誰がネコだって？アタイは虎だ！ネコじゃねえ！」

しかし少女はカレンの剣幕に物怖じせず、カレンの頭を指さしながら意地悪そうに口元を歪めて言った。

「あら、その可愛いお耳はどう見てもネコさんでしょう？」

「うっ……み、耳はカンケーねーだろっ！アタイは……ほわっっ！？」

カレンが少女ににじり寄ると、途端にガーディアンの目の色が変わった。カレンは困り切った顔でガーディアンと少女を交互に見ながら、情けない声を出した。

「……ちよつとよ……もうお前をどうこうする気はねえからさあ……こいつらにアタイを襲わねえように言ってくれねえか？」

不気味な目玉にいつも見られている気がして、カレンはガーディアンが気になって仕方がなかった。少女は首を傾げ、カレンの目を覗き込んでから答えた。

「ふーん……ちつとも信じられませんが……まあ、ネコさんが何をなさろうとこの子達に敵うはずありませんから、よろしいですワ」

そして少女はカレンを指さしながら、ガーディアンに向かって優しく言った。

「いいこと？このネコさんは悪いネコさんじゃないみたいだから、大丈夫ですワ」

ガーディアンは少女の後方の天井に落ち着いて、カレンが特に気味が悪いと思っていた緑の目をした金色のガーディアンが後ろを向いてくれた。カレンはやれやれと肩の力を抜いて少女に礼を言った。

「……ふう……ありがとよ！」

「どういたしましてですワ」

そして安心したカレンは、そもそも自分が何を言おうとしていたかを思い出した。

「そうだ、ところでよ……お前、青い髪の毛の野郎知らねえか？」

「……オレンジ色の瞳の案内人さんのことでしたら、わかりませんワ……でも、そう言えばここは……」と少女が改めて辺りをきよろと見回した時、プシュッとカレンの後ろのドアが開いてミロが現れた。

「あ、気が付いたんだ！……あのさ、名前なんて言うの？」

「あら……そういえば自己紹介がまだでしたワね、ワタクシは……」と少女は言葉を詰まらせたが、幸いミロの求めた答えは違っていた。

「ああ、えっと……この子達さ。名前あるよね？」

「！？」

ミロが差し伸べた手にガーディアンが寄ってきたので、生まれてはじめて自分以外にガーディアンが応じた瞬間を見た少女は目を丸くして驚いた。しかし、少女の驚きの表情をミロに無視された不満とみたカレンは、思わず吹き出していた。

「……ブハハッ！」

ミロの行為は確かに不満だが、それよりカレンの笑いの方が癪に障り、少女は一度カレンを睨めつけてから素っ気なく答えた。

「……その子達に触らない方がよろしいですワよ。……名前は金色

がムーで、銀色がスーと言いますの」

「へー……あつ、スーは女の子なんだね」

「……」

ガーディアンに性別は無いので、少女は怪訝そうに小声でカレンに尋ねた。

「ネコさん……彼、どんな方ですか？」

「……いや、会ったばかりでアタイは知らねえけど……あつ！」

カレンは立ち上がり、きょとんとしているミロに歩み寄った。そしてミロの瞳をまじまじと見つめながら尋ねた。

「お前……具合大丈夫なのか？」

ミロの瞳にあの時の濁りはなく、ミロは微笑んで答えた。

「うん、大丈夫。ありがとう！」

「……」

カレンはミロから目を逸らし、軽く安堵の吐息をついてから言った。

「……別に礼を言われることあねえけど……動いてねえで、もうちょっと休ん方がいいんじゃないか？」

ミロは一瞬きょとんとしてからにこやかに答えた。

「……大丈夫だよ！ちよつと寝たら結構スッキリしたし……それにほら、見なよっ！」

ミロは左の壁を指さしたが、カレン達が見ても壁には何もなかった。

「もっと近づいてさ」

ミロは壁に歩み寄り、壁におでこをつけるほど近寄って言った。

「ほら、あれが俺達がいた星」

「……ニヤにいつ？」

「……なっ……なんですってえ！？」

黒い壁は半透明な物質で宇宙が透けて見えていただけであり、よく見ると確かに小指の先程の丸い点が見えた。二人ともそれが本当に自分達がいた惑星かどうかわからなかったが、今は宇宙にいるこ

とだけは確かだった。

「はぁ……あんな遠くに……」と溜息混じりに呟いて、少女はガクリと項垂れた。元々逃げようと思っていたカレンはともかく、もうしばらく滞在しようと思っていた少女は、もう一度溜息をついた。不可抗力とはいえ、流れで巻き込んでしまった責任を感じたミロは少女に謝った。

「……ごめんね……」

しかし少女は急に顔を上げて、覇気のある声で言った。

「まっ……しかたありませんワね！」

そしてミロとカレンに向かって澁刺とした声で続けた。

「……あらためまして、はめまして！ワタクシはリン・ダ……リンと申します。……リンダとお呼びになって結構ですワ！以後よろしくお願いいたしますワね！……さ、次はネコさんの番ですワ」

「……」

ミロとカレンは急に元気になった少女に少し面食らったが、カレンは不敵な笑みを浮かべて、聞き捨てならない少女の言葉に噛みつきながら答えた。

「だからネコじゃなくて、虎だっつってんだろ……アタイにはカレンって立派な名前があるんだ！女海賊カレンってなあアタイのことさ！」

「……まあ、カレンだなんて、様子とは違って美しい名前ですワね」それはリンダの率直な感想だったが、印象と名前のギャップがあり過ぎたのか、余計なことまで言ってしまった。カレンは一度眉をひくつかせ、声のトーンを落として素っ気なく答えた。

「……お前はそのこまっしやくれた質^{たち}にぴったりな名前だな……」

「……」

一触即発の空気を感じたミロは、慌てて割って入った。

「あー、えっと……女海賊カレンさんにリンダちゃん……はじめまして！……俺はアテン星系から来たミロって言うんだ。よろしく！」リンダはまじまじとミロの顔を見て尋ねた。

「……アテン星系ですって？……あの、物と話すヘンな人達がいるって奇妙な星系の？」

言ったそばから、リンダはよくない言い方をしたと後悔したが、ミロはリンダがアテン星系を知っていたことに驚きつつ、リンダとはじめて会った時のことを思い出しながら苦笑した。しかし、もしも自分が故郷を貶されたら問答無用で殴りつけるカレンは、少し呆れた声で尋ねた。

「おい……喧嘩売ってるわけじゃねえよな？」

悪いと思っていたリンダは、すぐに頭を下げて謝罪した。

「ち、違いますワ！……ごめんなさい」

「いや、謝ることないよ！気にしないで。アテンがそう思われてるのは確かだからさ」

リンダに悪気がなかったことを感じたカレンは、一言多いのは天然だろうと思いつながらミロに向き直って言った。

「あー……ミロ」

ミロがきょとんとカレンを見ると、カレンは耳をピクピク動かしながら一度目を逸らして、もう一度ミロの目を見て言った。

「あー……アタイは海賊だ。受けた恩義は必ず返す。なんだかよくわからねえが……あんたはアタイの命の恩人だ。……なんでも言うてくれ。力になる」

カレンは、撃たれてから目覚めるまでのことは殆ど覚えていなかった。しかし誰かの温もりの中で身体の痛みが消えたことはおぼろげに覚えていて、自分を助けたのはミロに違いないと思っていた。ミロは傷を治したのは自分ではないと答えようとしたが、カレンはドラーゴを見ていないし話しても到底信じてもらえとは思えず、ここは胸に伝わってくるカレンの素直な謝意を受けることにした。

「……うん、ありがとう……でも、恩とかは気にしないで」

「……」

カレンがにやりと口元を歪めたので、ミロはそれを了解と受け取ったが、この時のミロは「受けた恩義は死んでも返す」という「宇

宙海賊の掟」を知らなかった。一方リンダは、カレンの話しは自分が気を失った後のことだと思ったが、カレンに放り投げられたの思い出した瞬間腹が立ってきた。

「……そういえばネコさん？……ワタクシ、あなたに狼藉を受けたと思いますが、お忘れになって？」

（チッ、やっぱ覚えてやがったか）と思いつつもカレンは一応謝ろうとしたが、出てきた言葉は違っていた。

「あー……しゃーねーだろ。あんときゃあーするしかねえし……大体おめえがガーディアン出さねえで素直に人質になつてりゃ、すんなり博物館から出られたんだよ」

（……博物館じゃないんだけど）とミロは思ったが、リンダは口元をひくつかせながら冷静に尋ねた。

「……今はつきり思い出しましたワ。……ねえネコさん？あなた、博物館の船を要求してましたワね？」

（だから、生物館なんだけど……）とミロは思ったが、カレンは答えず無言でそっぽを向いた。そしてリンダが「……そう」と呟き右手を挙げると、まるで瞬間移動したかのようにリンダの両脇にガーディアンが出現した。

「いっ!？」

カレンは一気に壁まで退き、リンダを指さして言った。

「てめえっ、そ、それは卑怯だぞっ!それからアタイはネコじゃねえつつてんだろっ!」

「あら、卑怯なのはどちらかしら?ねえ、ミロさん?」

突然ふられたミロは、慌てて取り繕った。

「ええっ!?!……いや、あの……リンダちゃん、も、もう済んだことだしさ!……ね?」

「そーだそーだ!済んだんだから、いーじゃ……ふニャあつっ!?!」
目の前にガーディアンが迫り、カレンは壁に張り付きながら情けない声をあげた。

「わ、わかったよっ!……アタイが悪かったよっ!ごめんよっ!」

リンダは左手を挙げてガーディアンを下がらせ、腰に手を当てながら満足そうに鼻を鳴らして言った。

「フンッ!……はじめから素直に謝ればよろしいのですワ!……でもミロさん?」

「……え?」

リンダはミロを軽く睨めつけて言った。

「……そもそもミロさんがワタクシを置いて行かなければよかったのですワ!」

「そーだっ!お前がテレパスなんか使わなきゃ、こんなクソ危ねえガキンちよに手え出さなくて済んだんだよ!」

よもや矛先を向けられるとは思ってもよらず、ミロは両手を挙げて激しく狼狽えた。

「い、いや……そう言われても……」

しかし、リンダの矛先はまたカレンに向けられた。

「……ちよいとネコさん?今ワタクシを、何とおっしゃいました?」

「あゝ?……てめえこそ、ネコじゃねえって何回言わすつもりだ?」

「ちよっ、ちよっと待って!二人とも落ち着いてっ!」

しかし二人はミロを睨めつけ、口を揃えてを猛然と言った。

「おめえは、黙ってろっ!!」

「あなたは、黙っててっ!!」

「あ……ハイ……」

ミロは後退り、身長差が五〇センチ近い二人の女性が睨み合う姿を眺めながら（もう……好きにして）と思いつつ……さてこれからどうしよう?……とりあえず食べる物が先かな?……でもまあ、どうともなるか……などと暢気なことを考えながら、足掛け五年も住んでいた惑星に心で別れを告げた。

つづく

ACT. 6 進路

「ニヤハハハハッ！……こりやまた派手に逃げらたねえ、館長さん？」

瓦礫の山となった生物館の中央ホールに、甲高い耳障りな男の笑い声が響いた。その身の丈二メートルほどの半獣人^{はんじゅうじん}は、似合わない基点星域タイプのビジネススーツを着ていたが、明らかに堅気の者には見えなかった。男は肉食系獣人特有の前寄りについた獰猛な目つきで館長を見下ろしながら、鋭い犬歯を剥き出してにやついた。館長はその男の目を見ずに、震える声で答えた。

「い……いや……その……予期せぬ……事態で……」

「そーねえ……カレンってのがここまでやらかすとは思えねえし、よっぽど凄げえことがあったんだろうよ……ねえ旦那？」

「……」

旦那と呼ばれた濃紺の長髪をゆったりと後ろで結った男性は、基点年齢で三〇歳前後のすらりとした長身の美男子だった。男性はかれこれ五分も無言で遺跡の瓦礫を眺めていたが、オレンジ色のゴーグル越しに半獣人を見ただけで何も答えなかった。

「……センパイ、あの人達だあれ？」

「……私が知ってるわけないでしょ……ここのオーナー達みたいだけど……」

ミロ達の逃亡から約半日が経過して、既に八〇八タウン銀河稀少生物館の現場検証は終わっていた。しかし署長とケイは「オーナーからの事情聴取に応じろ」という、つまり「なんとかして、全てカレンのせいにして」という本部の命令に従って生物館に戻って来ていた。そして自分達が散々破壊した遺跡の前で、これからどんな文句を言われるのかとうんざりしながら待っていたが、どうやら様子がおかしいことに署長は気付き始めていた。それは半獣人が話す度に、生物館の館長ともう一人の太った従業員が異様に怯えていたか

らだが、半獣人は従業員の肩に手を掛けて苦笑混じりに呟いた。

「しっかしホント……何のために高え金掛けてシエルターまで作っ
たと思ってるの？」

「すっ、すいません……まさかミロの奴が、もう……」

シュツという短い音の後、従業員はその場に蹲った。そして不審
に思った署長が従業員の背中に目を向けた時だった。

「……なっ!？」

「キャアアッ!？」

従業員の両手首がずり落ちる瞬間を間の当たりにしたケイは、署
長にしがみついてしゃがみ込んだ。そして従業員の手首から噴水の
ように血が噴き出し、急激な出血によってショック状態に陥った従
業員は「うっ……ぐっ……」と呻いた後、ガクガクと震えて気を失
った。

「……なあに?もーおねんねしちゃったの?」と半獣人は従業員を
ゆっくり蹴り倒し、気を失ったケイの前に出た署長に向かって薄ら
笑いを浮かべながら首を横に振った。

「……」

署長は銃を持っていたが、銃は取らなかった。それは本能的に敵
う相手ではないと判断したからだ。ケイを連れて逃げる機会はな
いと思った署長は、両手のひらを見せて抵抗する意思がないことを
示しながら、気を振り絞って口を開いた。

「……い、いたい……何のつもり?」

半獣人は愉快そうにやりと口元を歪ませて答えた。

「へえ……署長さんは……いや、ミランダちゃんはなかなかお利口
ちゃんだねえ」

そして既に声も出せぬほど怯えきっている館長を一瞥して、ポケ
ットから内反りのナイフを取り出して署長……ミランダに尋ねた。

「これな〜んだ?」

「!？」

それは既に本部に送ったカレンのナイフであり、それを持ってい

るということは、このオーナー達と本部になんらかの関係があることを意味していた。ミランダはごくりと唾を飲み込んでから答えた。

「……カレンのナイフ……」

すると半獣人はキンッ！と爪でナイフを弾いて愉快そうに言った。
「御名答！……こりゃ虎人の爪だ。……荒削りだが、いい爪だ……
……たぶんカレンってのは、リヨン辺りにいたっていう古代虎人の血を引いてる……ねえ旦那、カレンは俺にくれませんか？」

「……」

長髪のオーナーはそれに答えず、ゆっくりとミランダに顔を向け
て静かに言った。

「ミランダ・リムル……君達以外の関係者全員の記憶体を消去した。

……ロボットも」

「………！？」

一瞬ミランダは意味がわからなかったが、すぐに自分が逃れられない事態に巻き込まれたことを察した。パトロボを含め、この星の警官にはデータ改竄が不可能な「記憶体」という超微少記録素子が頭皮細胞に埋め込まれていて、勤務時間内の五感情報がそのまま記録されていた。そしてそれは事件が起きた際の証拠にするためのものであり、警官はこの記憶体の記録以外の証言は認められてはいなかった。つまり、もし物的証拠が消えればカレンの犯罪を立証できる警官はミランダとケイだけであり、オーナーの言葉は、この事件は無かったことになったという事後報告だった。ミランダはオーナーを睨めつけ、呟くように尋ねた。

「……殺したの？」

しかし、オーナーの変わりに半獣人が答えた。

「フフ、ミランダちゃんは優しい子だねえ……安心しな、もうみんなとつくの昔にタウンを出たよ……残ってんのはミランダちゃん達だけ……あ、そうそう！ミランダちゃんは、もうおまわりさんじゃないからね。もちろんその臭いお嬢ちゃんもね」

「……」

ミランダは一度短い溜息をつき、覚悟を決めて言った。

「ウチらを……どうしよってわけ？」

オーナーはゆっくりとゴーグルを外しながら、ミランダの目を見て言った。

「……時間が欲しい」

「……うっ！？」

咄嗟に目を逸らしたが遅かった。オーナーの真紅の瞳を見た瞬間、まるで体の中を虫が這い回るような吐き気を催す嫌悪感が胸に広がり、ミランダは思わず口を手で覆って俯いた。半獣人はミランダの髪を掴んで無理矢理顔を上げさせて、舌なめずりして言った。

「……ねえミランダちゃん。俺達忙しくてさ……俺達の代わりに動いて欲しいのよ」

ミランダは顔を背け、喘ぎながら尋ねた。

「……わ、私に……カレンを殺れてこと？」

半獣人はミランダの髪を放して、愉快そうに笑って答えた。

「ニヤハハッ！……ちやうちやう！カレンはどーでもいいのっ！……

……ミロだっけ？そいつを捕まえて欲しいわけ。もちろん隠密に、生きたままだね！」

「……ミロ？……あの生物学者を？……どうし……」

目の前に現れた禍々しい光を放つナイフ見たミランダは、言葉を飲み込んだ。そのカレンのナイフと良く似たナイフを舐めてから、半獣人は牙を剥き出して言った。

「質問は無し。……ミランダちゃんはただミロを捕まえればいいの……たぶんカレンと一緒にいるだろうが、ミロだけは殺しちゃダメ。もし殺したら……わかってるよねえ？」

「……わ、わかったわ……」

それだけとは思えなかったが、とりあえずミランダは殺人などの物騒な要求でないことにほっとしていた。そして半獣人は、鼻を摘みながら空を指さして言った。

「そんじゃその臭いお嬢ちゃんと一緒に、とっととミロを追うべし

っ！……あ、言つとくけど、もし逃げたら旦那に壊されちゃうからね？」

ミランダには「壊される」という意味がわからなかったが、すぐに先程の嫌悪感を思い出し、とにかく一刻も早くこの場から離れようと思った。

「ケイっ！起きなさい！……ケイっ！……ったくもうっ！」

ミランダは失禁しているケイを背負い、二三步歩いたところで立ち止まって、勇気を出して尋ねた。

「……お願い、最後に一個だけっ！……あの生物学者を捕まえたら、解放されるって保証はあるの？」

一瞬の沈黙を経て、半獣人のけたたましい笑い声が響いた。

「ニヤハハハッ！……ミランダちゃんは元気だねえ！大丈夫だから早く行けっ！」

しかしミランダは動かず、オーナーの返事を待った。そしてオーナーは、静かに答えた。

「……ミロを捕獲した時、君達は自由を得る……」

ミランダはすぐに歩き出し、生物館の玄関を出たところで突然ケイが目覚めた。

「う……ん？……センパイ？……やつ、やだっ！あたしったら……」

「……いいから、黙ってなさい」

「……」

ミランダの頑とした声に驚いたケイは、素直に黙ってミランダの肩をさすった。しかし次の瞬間背後から「ウワァァーッ！ッ！」というおぞましい絶叫が響き、二人は思わず身を竦めた。

「……な、なに？……」

それが絶命の悲鳴であることを知っているミランダは、歩幅を広げながら早口に答えた。

「……いいから今は何も聞かないで……後でみんな話したげるから……」

（くっ……なんでこんな目に……カレンめ！絶対許さないからっ！

！)
この理不尽な恐怖をカレンへの怒りに変えて、ミランダは眉間に皺を寄せ、唇を噛みしめながら真っ直ぐ前を見据えた。

カレンはコックピットに座り、そこかしこに触りながら嬉しそうに言った。

「へー……すげえな！こりやすっかりそのままアタイの船じゃねえか！」

ミロは苦笑を浮かべて相槌を打った。

「……そりゃあ、カレンさんが作った船だからね」

カレンとリンダの睨み合いのあと、ミロに案内されてカレン達が円形状の部屋に入ると、そこはまさに宇宙船の操縦室だった。そして一番前のメインコックピットは、カレンが砂漠に残してきた小型艇のコックピットとそっくりであり、カレンは素直に驚いていた。

「ミロ……お前すげえな！」

「……だから、俺が作ったんじゃないくて、俺はただカレンさんのイメージを使って……」とミロはもう一度説明しようとしたが、急に何かを思い出したカレンがミロの言葉を遮った。

「あっ！……そーいやお前、あん時なんて言ったっけ？ほら……水出た時だよ」

「え？……ああ、タレスって……あっ！？」

「おわっ！？」

「きゃっ！？」

ミロがタレスと言った途端、部屋全体がぼうつと輝いた。

「……今のなんだよ？……お前がやったのか？」

「……うん、そうみたい」と頭を掻きながら苦笑するミロを、カレンとリンダはまじまじと見つめた。カレンは腕を組んで少し考えてから尋ねた。

「アタイはあんま覚えてねえけど……つまり……今あのでっけえ瓶

の中に、このコックピットがあるってことだよな？」

瓶の中にいることは確かだが、現状を外から眺めることはできないので、ミロは断言できなかった。

「うん……そうだと思う」

「……ったく、ハッキリしろ！お前が出したんじゃねえかよ！」

今まで曖昧な返事には縁がない世界にいたカレンは、無意識にイエスカノーの答えを求めた。しかし、可能な限り正確に伝え合う世界にいたミロは、どう言えば正しく伝わるか考えながら答えた。

「えっと……俺じゃなくてカレンさんのイメージなんだ。……だからこれはカレンさんの船なんだよ」

「あの……」とリンダがおずおずと口を挟んだが、誰も聞いてくれなかった。カレンは顔をしかめて、呆れた口調でミロに言った。

「お前バカじゃねえか？アタイは瓶なんて考えてねえし、お前が出したんだからお前の船なんだよ！」

「いや……でも瓶になったのはカレンさんのイメージだから……」

「あの、もし？……」とリンダはもう一度口を挟んだが、やはり誰も聞いてくれなかった。

「だからよお、アタイが言ってるのはなあ……」とカレンが面倒そうに言い返した時だった。

「ちよっとっ！！」

「！？」

リンダの激高に驚いた二人は、目を丸くしてリンダを見た。カレンに投げられ気を失っていたリンダは、はじめから二人の話がわからず苛立っていた。しかし、それより二度も無視された怒りの方が強く、リンダは眉間に薄く皺を寄せて猛然と講義した。

「もうっ！さっきから瓶がどうか、いったい何のお話なんですのっ！？」

カレンは口元を歪ませ、愉快そうに尋ねた

「……ああ！おめえはおねんねしてたんだっけ？」

「おねっ……それはネコさんがワタクシを投げつけたからですワッ

「!?」

「……てめえは耳おかしいのか？」

しかし、また同じことを繰り返したくなかったミロは、思い切って二人に割って入った。

「待った！」

「!?」

ミロは一度カレンに苦笑を向けてから、リンダを見て言った。

「……ごめん！リンダちゃん……今説明するから……」

そしてミロは身振り手振りを駆使して「瓶」の成立を簡潔に話したが、タレスのことは自分でもわからないと説明した。リンダは無言で腕を組み目を閉じて聞いていたが、ミロの話しが終わるなり、小首を傾げながら尋ねた。

「……それじゃあ……このお船はお水でできてるってことですか？」

ミロは頭を掻きながら苦笑混じりに答えた。

「うん、まあ、そういうことになるけど……ホントは俺もよくはわからないんだ」

自分が知らないドラゴの件は信じられないとしても、自分の考えを覆すには至らないと思ったカレンは、また呆れた声でミロに言った。

「まーだ言ってやがる。やっぱお前バカだろ？この船はお前が出したんだよっ！」

しかし、カレンがミロをバカ呼ばわりするのが癪に障っていたり
ンダは、カレンを睨めつけて言った。

「ワタクシ考えてますの！静かにしてくださいませんか？」

リンダの頭の中ではまだ「？」が飛び交っていたが、リンダは額に人差し指を当てながら、なんとか「？」を組み立てて言った。

「わかりましたワ……そのタレスはともかく……よーするに、このお船はお水でできた瓶で……その瓶の中にワタクシ達がいて、コックピットはカレンさんので……お出しになったのはミロさんってことではないのかしら？」

「そーそー!……リンダ、おめえ結構飲み込みいいじゃねえか!」
カレンの言葉が冷やかに聞こえなかったリンダは、満足そうに微笑んだ。しかし、その解釈ではミロが瓶を出した事になっていて、ミロは納得できなかった。

「うーん……確かに瓶を出したのは俺だけど、でも瓶にしたのは……」

「だーっ、もういいっつーのっ!とにかくリンダの言うとおり、ここはお前が出した瓶の中の、アタイのコックピットなんだよっ! それでなんか文句あんのかっ!？」

訂正は文句ではないので、ミロは苦笑して答えた。

「……文句はないけど」

「じゃあもういいじゃねえかよ!」

「まあまあ、ところで……このお船はどちらへ参りますの?」

ミロとの論争に飽きていたカレンは、手を拳で叩いてリンダの話しに乗った。

「そーいやそうだな!……ミロ、どこへ向かってんだ?」

二人に見つめられたミロは、首を横に振って答えた。

「いや……ただ逃げることしか考えてなかったし……」

「ニヤにい?……じゃあ今どこにいいのかもわかんねえのかよ?」

ミロは頭を掻きながら素直に認めた。

「うん、全然わかんない」

「はあ……」と溜息をつきながら、カレンは慣れた手付でコックピットの計器を操り、船の現在位置をスクリーンに映し出した。

「おっ……なんだ、隣の流通惑星のすぐ近くじゃねえか!」と言った直後、「ひょっ!？」という奇妙声がして、カレンとミロは同時にリンダを見た。

「えっ? な、何ですの?」とリンダは咄嗟に誤魔化したか、カレンは怪訝そうに尋ねた。

「……しゃっくりか? 背中ぶっ叩いてやっか?」

「ち、違いますワ!……あの……流通惑星って……ヤマトン星です

の？」

「……それ以外ここに流通惑星があるっつーのかよ？」

「い、いえ……ございせんけれど……」と、少しひきつった笑みを浮かべながらリンダがそれ以上答えあぐねていると、ミロが暢気な声で言った。

「ちょうどいいから、その星でご飯食べよう！」

「おう！アタイはもうハラペコで気が立ってたんだ！そうと決まれば……おっ、この船駆動系とセンサー系はアタイの船っぽいけど、空調系がねえぞ？」

「そうなの？……でも、快適だよ？」

「あ、あの……」とリンダは口を挟んだが、カレンはミロを睨めつけて言った。

「カイテキダヨ？じゃねえよ！お前に聞いてんだよ！」

しかし、このまま済し崩しで決められなくなかったリンダは、拳を握りしめて一気に捲し立てた。

「ちよっとちよっとっ！！どーしてそうポンポンと決めてしまいますのっ！？ワタクシの意見は聞いて下さらないのっ！？」

（！……こいつ……結構怒りっぽい質だな……）と思いつつ、カレンはリンダに尋ねた。

「……ワタクシの意見ってなんだよ？」

リンダは作り笑いを浮かべながら、両手を合わせて一か八か言うてみた。

「や、ヤマトン星って、なーんにもありませんワよ？……他のお星にいたしません？」

しかし、それは全く逆効果の提案だった。

「……なんだ、お前ヤマトン知ってんのか？」

「！？」

どうしてか、リンダはカレンに嘘をつくことができず、むしろここで嘘を言ってしまったら負けてしまうと感じた。しかし、たとえ嘘をついたとしても事態が好転するとも思えないので、リンダ

は諦めの笑みを浮かべながら弱々しく答えた。

「……ええ、まあ、少し……」

「だったら丁度いいじゃねえか！他の星だったって、こっから半日は掛かるしな！」

「そう……ですワね……」と力無く請け合った瞬間、リンダの腹からクウーという音がして、リンダは腹を両手で覆って頬を真っ赤に染めて俯いた。

「ハハハッ！まずは飯だっ！」と愉快そうに笑ってから、カレンは計器を操作しながら言った。

「目的地は……ヤマトンつと！よっしゃ、行くぜっ！」

そしてすぐに瓶は加速し始めて、リンダはとりあえず空いている座席にどさりと腰を下ろし、深い溜息をついた。

（……ゲゲゲですワ……折角出てきましたのに、もう戻るなんて……）

リンダはお忍び中だったが、どこから忍んで来たかと言えば、これから向かう目的地だった。ステーションに着いたら逃げようかしら？それとも、このままご飯だけ食べてすぐに出発するのかしら？だったら……などと考えていると、ミロが暢気な声で言った。

「カレンさん、トイレってどこかな？」

「……知らねーよっ！てめえで探せよっ！」

つづく

ACT. 7 通商惑星ヤマトン

(……あら?)

船がポートゲートに差し掛かり、自分の見知ったゲートを素通りした時だった。カレンがゲートを間違えたと思ったリンダは、それを素直に伝えた。

「……ネ……カレンさん?メインポートのゲートはあちらですワよ?」

カレンは眉を顰めて一時リンダを見やり、目を戻しながら答えた。
「…アタイは海賊だぞ?メインポートに入るわけねーだろ。こーゆー時は組合のポートを使うのさ」

「……組合って?」

カレンは鼻で吐息をついてから、少し面倒そうに答えた。

「宇宙海賊組合だよ」

「へえー!宇宙海賊に組合があるんだ……そっか、海賊なら誰でも入港できるってことか!」

(……ここにも世間知らずがいたよ……)とカレンはガクリと肩を落としたが、組合の存在を知らないミロがすぐに自分の意図を察したことには感心しつつ、目の前に迫った着艦エリアに集中しながら答えた。

「まあ、そーゆーこった。……さあ着くぞ……」

(いや……世間知らずはアタイの方で……こいつらは宇宙知らずか……フフ)

地上に住まう一般人が宇宙に住まう宇宙海賊を知らないのも無理はなく、逆もまた然りであることに気付いたカレンは、そんな二人と行動を共にしている自分が少し愉快的気がした。

今の宇宙で「宇宙海賊」と言えば、所謂船や惑星を襲う略奪集団ではなく、宇宙流通に従事する星間運送業者のことだった。しかし、星間運送業者が何故海賊と呼ばれるかと言えば、それはおよそ八〇

〇〇年前に二つの銀河の九つの星系が共同で興した「第二期未開銀河フロンティア事業」に参加した勇敢な宇宙開拓者達を、敬愛を込めて「V I K I N G S」と称したことが始まりだが、この時はまだ海賊という意味ではなかった。

銀河の随所に存在するワームホールがまだ知られていなかった時代、彼らは世代交代を繰り返しながら銀河を漂流し、やっとの思いで大気もない惑星にたどり着いた。そして数千年かけ大気を調整し、土壌を改良し、時には凶暴な異星生物達と戦いながら悠久とも思える時をかけて未開銀河を開拓していった。こうして壮大な事業が終了した後、殆どの開拓者は自ら開拓した星に定住することを望んだが、定住を望まない者達は更なる向こうの銀河を目指し、宇宙で最も過酷な仕事であるワームホール探索を開始した。

そして、この探索を買って出た勇猛果敢な荒くれ者の子孫が宇宙流通に携わる者達であり、ミロ達の時代に伝わる「海賊」だった。カレンはその子孫ではなかったが、今いる星系に存在する最後のワームホール探索時に活躍したことで、この星系の海賊達から「女海賊カレン」と呼ばれていた。

「……着艦した。指示くれ」

船は音もなく無事に着艦し、途端にスピーカーから威勢の良い男の声が響いた。

「よう兄弟っ！随分腕がいいようだが、何処の誰で、何の用だい？

（アハハハハ！）」

（……なんだ？）

男の声の後に聞こえた大勢の笑い声が気になったが、とりあえずカレンは質問に答えた。

「アタイは女海賊カレンってんだ。ちよっくら食いもん補給しに寄っただけさ」

「えっ！？……了解！まあ、ゆっくりしていきな！（ワッハハハハハ！）」

（……なに笑ってやがんだ？）

ある程度自分の名が通ることを知っているカレンは、男の驚きは気に留めなかったが、後の笑い声が自分を笑っているような気がして不愉快だった。そしてカレン達が揃って船を降りると、そこには厳つい男達の爆笑が待っていた。

「アッハッハッハッ!! あんたがあのカレンだって!？」

「アハハハッ!!」

「……」

男の一人がカレンに尋ねると、また皆が一斉に腹を抱えたが、二度瞬きをした間にカレンは自分の名を呼んだ男の前に立っていた。「っ!？」

男達は息を呑み、カレンは自分より頭一つ背の高い男を見上げながら、静かに尋ねた。

「オイ、何がおかしい？」

「あ、いや……待ってくれ! 別にあんたを笑ったわけじゃねえんだ!」

不快な思いがミロの心に滑り込み、ミロは思わずカレンに声を掛けていた。

「!…カレンさん!」

「…んだよ?」とカレンは眉間に皺を寄せて振り返ったが、ミロとリンダの頭上を見上げた瞬間、「うっ!」と呻いて身体を強張らせた。

「……?」

ミロはカレンの反応に苦笑したが、リンダはカレンが船を見ていることに気付き、船が瓶であるという話を思い出し、船から少し離れて船全体を見渡しながら驚きの声をあげた。

「……まあ!…!…! 本当に瓶でしたのね! 驚きましたワ!」

「ブハハハッ!!」

男達は堪えきれず吹き出したが、カレンは腕を組みミロを睨めつけてから、どすの利いた声で呟くように言った。

「……どんな船に乘ろうと、アタイの勝手だろ?」

「！……あ、ああ、そうだな！……ぐっ……ククッ……」

カレンは男達の相手を止めて、ミロの元へ戻って言った。

「ミロ……この船そんなにおかしいか？」

「……うん、俺は気に入ってるよ」

ミロの苦笑は、男達とは異なる苦笑だった。カレンは不敵な笑みを浮かべながら、短く笑って言った。

「フフッ……とっとと飯食いに行こうぜ。腹減った！」

「あっ！待ってですワ！」

カレン達は入星審査を受けるために審査ゲートへ進み、十メートル程の自動審査トンネルに入った。トンネルを歩きながら、ふとミロはガーディアンがいないことに気付いたが、リンダが隠したのだろうと思って黙っていた。それよりミロは、船を降りる前から幾つかの疑問に囚われていた。

ミロの予想では、自分とカレンは疾うの昔に指名手配されていて、入星と同時に捕らえられるはずだった。しかし、カレンが名乗って船を降りても笑われただけであり、あの事件が広まっていなかったことを知って内心驚いていた。そこでミロは、もし何らかの理由で事件が伏せられているとしても、まずは様子を見ながらリンダを安全な場所で穏便に開放しようと考えた。

そしてもう一つ、これはミロの性分だが、通称惑星の大きな財源であるメインポートのすぐ横にもう一つ大きなポートがあり、それが「海賊なら誰でも入港できる」ポートであるという事実を、ミロはすんなり飲み込めなかった。しかし、それを考えるにしても材料が足りないのです、それよりどこで何を食べようかという考えに移った時だった。ミロ達の前に屈強そうな入星審査官が現れ、先程の男達とは違う親しみのある笑顔で言った。

「あんたがカレンさんか！噂は聞いてるぜ！……こんな辺鄙な星に何しに来たんだい？」

「言った通り、食いもん調達にきただけさ。腹減ってんだ。もう下に降りていいかい？」

「ああ、身分証見せてくれりゃあ、かまわねえよ」

（身分証！？……ピンチですワ！）

顔を見られただけでも危ういの、身分証を見られたら言い逃れられないリンダは、いっそのまま素性を明かして審査官を丸め込んでしまおうかと思った。しかしそんなリンダの葛藤を余所に、カレンは気楽な口調で堂々と答えた。

「身分証？んなもんポリスに置いてきちまったよ！」

「ハハッ！いったい何やらかしたんだか……組合の身分証ならここで再発行できるぜ？」

「……腹減ってんだよ。後じゃダメか？」

「一応規則だからな……そっちの兄ちゃんのももいいぜ？」

（！）

カレンと審査官のやり取りを楽しく聞いていたミロは、急に振られて驚きつつもカレンの態度に習って堂々と身分証を提示した。

「ああ……どうぞ」

ミロの身分証を見るなり、審査官は怪訝そうにミロを見て尋ねた。

「……兄ちゃん学者さんかい？」

「はい」

「へえ……」

若い女海賊と学者という組み合わせに興味を抱いた審査官は、二人の関係が知りたいと思った。しかし、空腹で不機嫌そうなカレンを茶化すのも大人気無いと思い直し、ミロの身分証を記録してからカレン達の入星を許可した。

「……オッケ！……帰りにまたな！」

「おうっ！ありがとよ！」

しかし、（ほっっ……ですワ……）とリンダが胸を撫で下ろした時だった。

「あの……ちょっといいですか？」

「ん？なんだい？」

ミロはきよろきよろと当たりを見回しながら、カレンとリンダに

とって信じ難いことを口にした。

「……警察はどこですか？」

（！? ……バカミロ！なに考えてやがんだ?）と思いつつ、カレンは組合のポートに警察がないことをミロに話しておくべきだったと後悔したが、ミロが海賊でないなら知らなくて当然と考えた審査官は、ミロの場違いな質問に気さくに答えた。

「警察は下か隣のポートだ。ここにはねえよ」

「……どうしてここに警察がないんですか？」

堪り兼ねたカレンは、思わず口を挟んだ。

「警察なんて下行きやいくらかでもあんだから！早く飯食いに行こうぜ！」

しかしミロは、カレンを見もせずに素っ気なく言った。

「……先に行つていいよ」

「! ……あゝ? 今なんつった？」

「!?」

カレンの声に痴話ゲンカとは思えぬ殺気を感じた審査官は、慌てて二人の間に割って入った。

「まっ、まあまあ！ここで喧嘩しねえでくれっ！」

審査官はカレンの剣幕に少しも動じないミロを見て、手っ取り早くこの場を治めるには、この変な学者を納得させた方が早いと思つた。

「あー、学者の兄ちゃん。ここは海賊の組合だ。海賊がなにしてるかは知ってるかい？」

「はい。物資の流通ですね？」

「そうさ！俺達は運び屋だ……でけえ声じゃ言えねえが、時にはグレーなもんも運ぶ。警察や監察にうろうろされたら商売になんねえから、十何年か前に元締めの中が専用ポートを建ててくれたのさ。で、そんな時から警察とは仲が悪いってこった！だからここにや警察はねえのさ。わかったかい？」

ミロは少し考えてから、微笑んで答えた。

「……なるほど、わかりました！ありがとうございます！」

「ああ、わかってくれて嬉しいよ」

カレンは腰に手を当て、やれやれと吐息をついて言った。

「ったくバカミロ！わかったんなら早く飯食いに行くぞ！」

「う、うん。行こっか」

(……)

そしてカレン達は降下エレベーターへと向かって行ったが、審査官はミロの背中を見ながら、なんとも言い難い不思議な感覚を味わっていた。様々な人物を見てきた審査官の目には、カレンは噂に違わぬ若く美しい女豹のように見えたが、まだ少年の面影が残るミロの方が幾分大人に見えていた。そしてミロが学者であると知った時、自分の目に狂いはなかったと思うと同時に、何かを警戒している自分にも気付いていた。しかし、照合しても身分証は本物であり、疑うだけ無駄かと審査官が思った時だった。若い管制官の一人が駆け寄り、フィルムモニターを差し出して言った。

「ラッキオさん、ちょっとこれ見てくださいよ。ついさっき統制局から回ってきたんですけど……」

それはカレンの低解像度画像であり、上には「女海賊カレン 見つけし者にカテナ星一泊二日の旅プレゼント！（※一名様）」と書かれてあった。

「んー？……ああ、ポリスでなんかしたみてえだったけど……にして、どこの賞金稼ぎか知らねえが、一泊二日はみみっちいな」

「ですよねえ！……あと、これ見てください。こっちは昼前に回ってきたんですけど……」

「んー？……っ！？」

管制官が切り換えた画像を見た審査官……ラッキオは、その画像の少女を見て息を呑んだ。それは紛れもなく今し方カレン達と共にいた金髪の少女であり、画像の上には「探し人 リン・ダイソン・リング 発見者に五〇〇〇〇〇リル進呈」と書かれてあった。

(……参ったなこりゃ……子供だと思って油断した) などと思いつ

つも、ラッキオは咄嗟に平静を装った。

「あー……こりゃあ、さっきの子にちよつと似てるな……でも違うだろ」

「俺もそう思うんですけど……ほら、これこれ！」と管制官はまたカレンの画像に切り換えて、カレンの脇の下に小さく見える金髪を指さして言った。

「……まあ、違うと思うんですけどね……カレンさんと一緒に来たってのが、ちょっと気になって……それにしたって、流石ダイソンの令嬢！五〇〇〇〇リルったら家一軒買えますよねえ！」

（ったく、余計なことに目敏いやツだ）と思いつつも、ラッキオは話を逸らすきっかけを掴んだ。

「……んなうわついたこと言ってんじゃねえよ。お前、家建てたって聞いてるぞ？」

「あ、そうなんですよ！今度は非遊びに来てください！部署のみんなで！」

「おいおい、どんだけ広い家だ？……まあ、いずれ遊びに行ったらそろそろ仕事に戻ってもいいんじゃないか？」

「！すみません！では！」

「おうっ！バリバリ働いて借金返さねえとな。頑張れよ！」

「はいっ！」

いそいそと部署へ戻る管制官を見送りながら、ラッキオは大きな溜息を洩らした。

（はあ……しっかし、マジで参ったな……お孫さんいるってなあ聞いてたが……まあ、顔知らなかったのはマジだし………バックレるっきゃねえな！）

もちろん審査官という立場上リンダを放って置けるはずはないが、ラッキオにはカレンとミロがダイソンの令嬢を誘拐しているようには見えなかった。

（……ま、船はおさえてあるし、どーとでもなるか……）

(……まだかよ?……)

(……遅いエレベーターですワね……)

地上までおよそ三分半掛かるエレベーターの中で、カレンとリンダは同じようなことを考えていたが、ずっと無言だったミロがふと口を開いた。

「……カレンさん」

「なんだよ?」

ミロは一拍おいてから、カレンの目を見て尋ねた。

「あの人が言ってた元締めの中中って、星間ギルドのことだよね?」
(……んなこと考えたって腹は膨れねえのに、学者ってのはヘンなヤツが多いってホントだな) と思いながら、カレンは溜息混じりに答えた。

「……ああ、この辺の流通仕切ってるのはギルドだからな」

ミロは一瞬にやりと口元を歪ませてから、いつもの顔に戻って言った。

「ありがとう! そっか、いろいろわかってスッキリしたよ。……でもなんか、海賊のイメージちょっと変わったなあ……」

普段誰にどう思われようと構わないカレンだったが、この時は何故か、我知らず尋ねていた。

「……なんだよ?……海賊をどう思ってたんだよ?」

しかし、ミロの代わりにリンダが答えた。

「そうですワね……海賊さんて、もっと粗野で乱暴な方々と思ってましたけど……意外に随分きちんとしてましたワね……やっぱり少々粗野でしたけど」

「……あのなあ、そーゆーのをセンニユカンってんだ」

「あら、その通りですわ! はじめてお会いした海賊さんがカレンさんですもの、そう思っても不思議じゃないでしょう?」

「……ニヤに?」とカレンはリンダを睨めつけたが、その時「グウー!」という見事な音がミロの方から聞こえてきた。

「はは……ホントにお腹空いたね」

「……はあ……空き過ぎちまって、リンダの相手する気にもならねえよ……」

「……はあ……カレンさんの髪が、パイナップルに見えますワ……」

一方その頃メインステーションの入星審査ゲートでは、二人の審査官が心から後悔していた。

「……ですから、お二方のご経歴は、よくわかりましたから!」

「あ、ほらっ! お連れの方があちらでお待ちですよ!」

「そんでねっ、これがあたしのお婆ちゃん! お婆ちゃんも警察官だったの!」

「いや、その……」

賞金稼ぎを名乗る二人の女性が審査ゲートに入って来たのは、これこれ十分前のことだった。特に怪しいと思ったからではなく、いい歳して可愛いフリルがついたピンクのロングスカートを纏った女性、他にどんな服を持っているのかちょっと見たいと思ったただけだった。しかし、彼女はトランクを開けるや否や家族のスナップ画像を取り出して、長身で黒髪の相方と自分の生い立ちを語り始めたのだった。

(……そろそろヤバイわね……)

メインステーションの審査ゲートは三コースあるが、他のコースに列がではじめていた。これ以上一人に構っていたら業務全体に影響が及ぶと考えた審査官は、一旦彼女を別室に案内しようかと思っただが、いままで何度視線を送っても黙っていた彼女の相方がやっと口を開いてくれた。

「ケイツ!!……いつまで遊んでんの? いい加減にしないともう行っちゃうからね!」

「あっ! センパイ待って!」

ケイは出したバッグの中身を大急ぎでしまいながら、監察官の一

人に尋ねた。

「あ、あのね……海賊組合にはどうやって行ったらいいの？」

審査官は一度総合案内カウンターを指さし掛けたが、すぐに別な方向を指さして答えた。

「……あちらの奥にポーター用の端末がございますから、ご自分でお調べになってください」

「はい、ありがとうございます！」

「……」

他のゲートに並んでいた入星者がぞろぞろと向かってくるのを眺めながら、審査官の一人が溜息混じりに呟いた。

「はあ……ねえ、あの賞金稼ぎって、ここへ何しに来たのかしら？」

もう一人の審査官は、小首を傾げながら答えた。

「……一時就労で入ったんだし、仕事に来たんじゃないの？」

「仕事って、賞金稼ぎ？この星でそんなことできるわけじゃないじゃない」

「知らないわよ。……賞金稼ぎが賞金だけ稼いでるわけじゃないっしょ？」

「じゃあ何かしら？」

「だから知らないってば！ほら来たわよ。三番目の男、銃持ってるからね」

「はいはい」と

ミランダがミロ追跡の足掛かりにこの星を選んだ理由は、幾つかの必然と少しの期待からだった。あれからミランダは、スペースポートの端末から特殊な瓶型宇宙船の行方を追ったが、どの惑星のポートにも入港記録はなかった。つまり船はまだ宇宙にいるか、どこかに不法入星しているか、正規のポートを使っていないかだが、どの道不法入星している場合は発覚するまで動けないので、動くならば宇宙を探るか、或いは正規のポート以外のポート……宇宙海賊組合のポートを持つこの星からだともミランダは判断した。

しかし、現時点でミランダが探しているのはミロではなく、カレ

ンの情報だった。ミランダは「アテン星系出身の生物学者」という情報しかないミロを探すよりも、ある程度名の知れたカレンの方が圧倒的に探しやすいし、ミロが今もカレンと共にいるとは限らないが、少なくともカレンを捕らえればミロの行方を聞き出すことができると考え、とりあえずヤマトン星限定でカレンの個人指名手配書を出した。

そして、そこまでは理に適った追跡捜査だったが……もしミランダが少しでもこの星の内情を知っていれば決して「賞金稼ぎ」を名乗ることはなかったが、切羽詰まっていたミランダは、紛争でもない限り星の内情にまで気が回らなかった。

「エヘヘっ、賞金稼ぎって憧れてたんですねー！」

「……まあ、もうポリスじゃないし……カレンを追うにはこの方が都合いいからね」

「先輩、とっても似合ってますよ！先輩ってスリムで羨ましいなー！」

ミランダは基点星系仕立ての黒革のノースリーブとタイトな革パンツというシンプルな出立ちだったが、それはミランダのスタイルの良さを際立たせ、如何にも腕の立つ女という印象だった。しかし、ケイの装いはケイ本人の言葉を裏切る、どちらかと言えば少女趣味的な格好であり、それでもケイにはとても良く似合っているのので、ミランダは褒めてくれたお返と、若干の忠告を込めて答えた。

「……そお？ありがと。ケイもそれ似合ってるよ。……でも、それじゃあちよっと動き難いんじゃない？」

しかし、ケイは軽やかにくるりとターンして、嬉しそうに答えた。

「大丈夫ですよ！ほーら！」

そして突然スカートを腰までたくしあげ、ガーターベルトを露わにして言った。

「賞金稼ぎって、こーゆーところにナイフとかを隠したりするんですよね！」

「ばっ！？」とミランダは咄嗟にしゃがんでケイのスカートをおろ

したが、時既に遅く、途端に周囲から男達の口笛が鳴った。

「……このバカっ！目立ってどーすんのよっ！」

「エヘヘっ、ごめんなさーい」と舌を出したケイを見て、ミランダは溜息混じりに呟いた。

「……ったくもう。遊びに来たんじゃないんだからね？……命掛かってるって、ちゃんとわかってる？」

「うん！わかってまーす！……でも先輩、あたしお腹空きました！」
「……」

実のところ、ミランダはすぐにでも宇宙海賊組合へ行ってカレンの詳細なパーソナルデータを手に入れたかった。しかし、そのためにはケイの能力が不可欠であり、自分も空腹だったので、ミランダはケイの申し出を受け入れた。

「……じゃあさっさと下に降りて、ご飯食べようか」

「はーい！」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9428a/>

BOTTLE VIKINGS !

2010年10月9日05時48分発行